

和文概要

太宰春臺『倭讀要領』譯注（一）

坂本具償^{*1}

財木美樹^{*2}

An Annotated Modern Japanese Translation of "Wadoku-Yoryo" by Dazai Shuntai (1)

Tomotsugu SAKAMOTO

Miki ZAIKI

本稿は、太宰春臺『倭讀要領』巻上に対して訳註を施したものである。『倭讀要領』は漢文の訓読・音韻・発音などの基礎知識について述べた書で、今日でもなお漢文学習のために有用な書であるが、昨今は他の江戸時代の著作と同様に読まれることが少ないように思われる。それは原本が手に入りにくいこともあるが、江戸時代のもの、旧字体、片仮名書き、句点しか施されていないなどという理由で敬遠する人が多いからであろう。そこで本稿では、現代語訳を作成するとともに、漢文に興味を有する人、漢文を学ぶ初学者に原文でも読みやすいように平仮名で校訂し、句読を施したテキストを附した。

キーワード

太宰春臺 倭読 倭音 倭語

*1香川高等専門学校高松キャンパス一般教育科

*2比治山大学非常勤講師

太宰春臺『倭讀要領』譯註(一)

坂本具償

財木美樹

はじめに

太宰春臺(一六八〇〜一七四七)、名は純、字は徳夫、通称は彌右門、春臺はその号である。『倭讀要領』はその春臺が漢文の訓読・音韻・発音などの基礎知識について述べた書である。『倭讀要領』は江戸時代の著作であるが、その「凡中華の書を讀むは、中華の音を以て、上より順下に讀みて、其の義を得るを善とす」(倭語總説)という主張や、音韻・発音などの基礎知識を含んだ内容は今日でもなお漢文学習のために有用な書であることはいままでもないが、必ずしも広く読まれているとはいえない。それは原本が入手しにくいというだけでなく、江戸時代のもの、旧字体、片仮名書き、句点しか施されていないなどという理由で敬遠する人が多いからであろう。そこで本書の普及をはかり、漢文専攻の人だけでなく、漢文に興味を有する一般の読者にも読んでもらおうと考えて現代語訳を作成し、さらに原文で読もうと思ふ人のために平仮名で校訂し、句読を施したテキストを附した。「窮郷寒士、書を読まんと欲すれども未だ其の方を知らざる者、觀て焉を取る有り、其れ亦補有るに庶からんや」(本書敘)であることを期待するものである。

版本

・『倭讀要領』三卷 享保十三年(一七二八)

影印本

・倭讀要領 勉誠社文庫66 一九七九・八
・『漢語文典叢書』第三卷 及古書院 一九八九・三

凡例

- 一、本譯註は太宰春臺『倭讀要領』卷上に対して訳註を施したものである。
- 一、本譯註は『倭讀要領』享保十三年刊を底本とし、現代語訳と原文(平假名校訂)から成り立つ。

『倭讀要領』卷上(現代語訳)

倭讀要領敘

わたしは幼いころから先君子の「書を読まざれば以て士と爲る無し」①という訓戒を奉じていた。そこですこしずつ孝経・論語の諸書を取りあげて、句読を口授された。しばらくして家を出て外の教師について古文を誦習したところ、読書を好むようになった。最初は性理家の言をおさめたが、のちになってようやくこれに疑問をもち、古学の方法を求めてあちこち訪ね歩き、聴きまわったが、得るものはなかった。かつてある師から華語を学んだことがある。退席して以前に(訓読で)誦習した詩書古文を振り返ると、外国語を学習しているように、十のうち八九は意味をなしていなかった。黄備の教え(顛倒の読み)は、人を楽にさせようとして、かえって弊害をのこしたことをはじめて知った。弱冠(二十歳)のときに遊学の志をいだき、笈を背負って千里の路を旅し、学問や往古のことを嗜み好む者があると聞けば、かならずおもむいて語りあったが、おおむね実際に会うのと他人から聞くのとは大ちがいで、結局私の気持ちを満足させることはなかった。わたしは外で八年間学んだが、学問的に得るところはなく、帰郷するのがもつとも遅くなった。ただひとり徂徠先生に出会って、先生だけがわたしの目指すところであると思った。先生の論説を聞いたところ、わたしがさきに探し求めていたことがすべて存在していた。なおかつ先生は華語に堪能であり、とりわけ外国語のような読み方をにくんだことも

わたしの平素の気持ちと一致した。しかし思うに倭読がむつかしく、大きな弊害をもたらすことがあります。わかつたにすぎない。これ以後、長年古学について思いを致した。生まれつき愚かなわたしではあるが、熟慮した結果、もしひとつでも得ることがあれば、時々ともに学ぶ者と議論した。ある人からそれらのことばを撰次して初学者を訓戒したらどうかとすすめられた。そこで手づから記録して一編とし、『倭讀要領』と名づけた。そもそも倭語が中夏の書を読むのにむいていないことは明らかである。わたしはこのことを実行するには非力な者であり、どうして大勢を動かすことができようか。ただ書を読もうと思っているがまだその方法を知らない地方在住の貧困なものがこれを見て資することがあり、なにかしら助けになるかもしれない。わたしは若いころから先君子の訓戒を奉じた結果、読書を好むようになった。とすればこの世の中にわたしと同じ嗜好のものがいないわけではないであろう。とすればこの書がうち棄てられないことを期待してもよいのではないか。

享保十三年戊申（一七二八）二月初吉

東都後學信陽太宰純自叙

序終

①未詳

倭讀要領目録

上卷

倭読の総説第一

日本には文字がなかった説第二

中国の文字が始めてこの国に通行した説第三

倭音の説第四

倭語の説第五

顛倒の読みは文義を阻害する説第六

倭音の正誤第七対訳 本濁、新濁、連声の法附たり

中卷

倭語の正誤第八

倭読の正誤第九

読書法第十

下卷

点書法第十一

抄書法第十二

発音法第十三

倭読例第十四

学則第十五

学戒第十六

目録終

倭讀要領卷上

信陽太宰純徳夫撰

倭読の総説

「倭読」とは倭語で書を読むことである。倭語の読みがいずれの世から始まったかはわからないが、菅江二家の読法①が昔から伝わっている。古いにしへは皇朝の人は貴賤に関係なくみな學術を有していたが、王政が衰えてから文学の道は禪僧に伝わり、三四百年を経過した。これが一変である。近世、慶長年間から、藤原惺窩②・林羅山③の二先生があらわれて、儒学を士大夫の間に提唱した。元和太平の後、儒教が次第に国内に浸透し、農工商賈も孝悌忠信の道を聞くのにあずかれるようになった。これはまことに国家明德の感化であり、二先生の功績は少なくないといえる。ただ二先生は宋儒を尊敬信奉し、新註の四書五経を用いて二程・朱子の教えをひろめた

ので、古字が廃れて宋儒の説がさかんに世に行われ、今ではすでに二百年となった。これも一変である。しかし薩摩の僧文之④が四書を読み、羅山先生が四書五経を読んで以来、これにならう者が数十家あり、それぞれテキストを有し、世に行われた。今そのテキストを観ると、各家たがいに得失がある。大抵それらの人は句読を知らず、文法を理解せず、字義に明らかではなく、ただ倭語の意味で読むだけなので、文義を誤ることがはなはだ多い。そのうち山崎氏のテキストは比較的すぐれている。山崎闇齋先生⑤は一心に朱氏の書をきわめたので、新註の趣旨を得たところがすこぶる多い。しかしこの人も文章の道にくらく、ただ門戸を立てようとしただけなので、省略してはならないテニヲハを省略し、華語でもなく倭語でもない鄙野な読みを行なった。そもそも中華の書を読むには、中華の音を用いて上から下に順に読んでその意味を理解するのが最善の方法であるが、わが国の人が華音の読みを習うことは容易ではないので、やむをえず倭語の読みを行うのである。だから文義さえ失わなければ、その読法は人々の心に任せて（自由な読み方をしても）よい。どうして門戸を立てて、一家の法を定める必要があるのか。ただ要領を理解してその規律にしたがえば、類推して自然に活法を悟ることができる。「門戸を立てる」とは流義を立てることである。「要領」とは、「要」は腰と同じで、衣のこしである。「領」は衣のえりである。衣をもちあげるには、腰と領をもって持ちあげると全体がもちあがるという意味である。だから学問の道も、要領を求めることに務めなければならぬ。要領を得たうえに日夜思い巡らせば、叡智が自然に発出して、最終的に大要を得ることができるのである。

①「菅」は菅原家、「江」は大江家を指し、いずれも代々学問を以て一家を立てた。林鷲峰『鷲峰文集』七十九に「本朝累世の儒家は菅江二家を宗として、古人、清公・是善・道眞を擧げ、諸子諸孫に於て、淳茂・文時・輔正・輔昭を其の次位とす。江家にては音人・朝綱・維時・匡衡を擧げ、匡房は博識なれども、詩文は先祖に及ばず」とある。

②藤原惺窩（二五六一〜一六一九）、江戸初期の漢学者。名は肅、字は敏夫、

惺窩はその号。もっぱら朱子学をおさめ、著に『龍頭評注四書大全』がある。

③林羅山（二五八三〜一六五七）、江戸初期の漢学者。名は忠、字は子信、羅山はその号。二十二歳の時に藤原惺窩の門に入り、朱子学を学び、四書・五経に訓点を施した。

④薩摩安國寺の僧で、室町時代。日向飢肥南郷外浦の人。名は文之、通称は玄昌。文之が和訓を施した四書集注が寛永二年（一六二五）に出版された。

⑤山崎闇齋（二六一八〜一六八二）、江戸時代、京都の人。名は嘉、字は敬義、闇齋はその号。はじめ仏教を学んだが、野中兼山のすすめで程朱の学に転じ、四書・朱子文集・朱子語類などを読んだ。会津藩の保科正之に聘せられ、その没後は京都に帰り、門人数千人におよんだ。

日本には文字がなかった説

日本には文字はなかった。今の国字^{かな}の以呂波は、弘法大師が作ったと言ひ伝えられている①。これを国字^{かな}と称するが、わが国の文字ではない。中華の草書の字体を利用して、その形をくずして別にひとつの書体としたものである。わが国に本来文字がなかったことは、先賢の説によつて明らかである。齋部^{いむべ}の廣成が古語拾遺の序に「蓋し聞く、上古の世にはまだ文字はなく、貴賤老少が口々に伝え、前言往行は存して忘れなかった」②という。さらに大江の匡房^{まさ}の菅崎の宮の記に「我が朝が始めて文字を書いて、繩を結ぶ政に代替したのはこの朝に創まる」③という。「この朝」とは応神天皇の時を指す。さらに三善の清行^{きよゆき}の昌泰四年の勘文に「上古の事はいずれも口伝から出ている。だから代々の事変には遺漏があるにちがいない」④と書いている。これらはいずれも（わが国に文字がなかったこと）証拠とすることができ。近ごろ筑前の貝原損軒先生も、これらの説を根拠として、わが国に文字がなかったことを明確に論証した⑤。損軒はわが国の歴史記載に博覧な人なので、その説はもつとも信頼に値する。巫祝の徒がしばしばわが国に文字があったというのは、

すべて孟浪の談である。今彼らの家に上古の国字かなとして伝わるものは、陰陽家の符書の字の類であり、はなはだいい加減なものである。学者はただ先賢の定論を信用するべきであり、でたらめの説に惑わされてはならない。

①以呂波は弘法大師が作ったという伝承は、大江匡房の『江談』天仁二年（一

一〇九）八月の條（『江海抄』引）にみえ、また卜部兼方『釋日本紀』一、開題にも「又問、假名字誰人所作哉。先師説云、（中略）伊呂波者、弘法大師所作之由傳歟。此者自昔傳來之和字伊呂波被作成之起也」とある。ただ近年「大矢透が……空海（七七四—八三五）より百年以上あとの成立であらうと主張して以後は、それが定説となって支持されている」（小松英雄『いろはうた』、中公新書558、一九七九、P 142）。大矢透『音圖及手習詞歌考』、大日本図書、一九一八、勉誠社、一九六九。

②齊部宿禰廣成『古語拾遺』序「蓋聞、上古之世、未有文字、貴賤老少、口相傳、前言往行、存而不忘」。

③大江匡房『管城宮記』「我朝始書文字、代結繩之政、即創此朝」。

④三善宿禰清行『昌泰四年革命勘文』「謹案、史漢雖一元之終、必皆有變事。而本朝古記大變之年、或無異事。蓋以文書記事之起、始于養老之間。上古之事、皆出口傳。故代之事變、應有遺漏」。

⑤貝原益軒『自娛集』卷之二「漢字用倭音論」「我が邦、上世に文字無し。古語拾遺及び匡房管城廟記を讀みて知る可きのみ。此の二書は古代の作、佐證と爲す可し。或ひと以て上世に國字有りと爲すは妄説なり。是れ無稽の言、信ず可からず」（我邦上世無文字。讀古語拾遺及匡房管城廟記而可知而已。此二書古代之作、可爲佐證矣。或以爲上世有國字者妄説也。は無稽之言、不可信焉）。

『點例』卷之上、總論「上古ワガ國ニ文字ナカリシ事、古語拾遺ノ序及朝野群載ニ載スル所大江ノ匡房管城ノ記ニ見エタリ。又三善清行昌泰四年革命勘文ニ曰、上古之事皆出口傳。故代代事變應遺漏。此等ノ説ヲ以テ證ト

スベシ。今巫覡ノ家ニ上古ノ倭字ト稱シ、符ニカク字アリ。是遵生八牋等ニノセタル中華ノ道士ノ符章ニカク僞字ノ類ナリ。上古ノ倭字ノカタチ此ノ如クナルベカラズ」。

中国の文字が始めてこの国に通行した説

応神天皇が即位されて十六年に、百済国より王仁にんという博士を招聘して、太子に書を授けさせた。王仁はやってきて論語と千字文を献上した①。この時から中華の文字がわが国に通行するようになった。しかしこの時、王仁がいずれの国の音を伝え、いかなる読法を教えたのかということについては聞いたことがない。王仁は博士なので、中華の音に通じ、中華の読法を理解していたかもしれないが、この国に伝わる字音が中華の音でないことから考えると、ただ百済の音、百済の読法を教えただけとみえる。百済の読みもどのような読法であったかということとはわからないが、おそらく今の朝鮮の読法のようなものであったのであろう。朝鮮にはわが国のように、顛倒の読みがあり、字にこの国のテニヲハのような助声があった。諺文げんもんというこの国の以呂波のようなものがあり、これを字の側に細書して、中華の語を朝鮮の語として読んだ。字音が異なるだけであり、わが国の読法と異なるところはない。夷狄の言語は万国すべてこのようであった。王仁の時には百済にも諺文があり、これをわが国に伝えたのであれば、今の世にもこついてもおかしくないのに、一字も伝わっていないことを考えれば、その時、王仁は諺文を用いず、本書のまま授けたのであろう。以呂波の中の「へ」「つ」の二字は百済の諺文にちがいないという人がある②が、いかにもありそうなことである。片仮名というものは吉備公が造ったと言ひ伝えられている③。中華の楷書の偏傍の上下の二画三画を切り取って倭語を細書しやすくしたものである。のちに以呂波が作られて、それが結局国俗通行の文字となった。この二種類はわが国で造られた文字なので、同じく国字かなというが、実はすべて中華の文字から発出したものである。

①『日本書紀』卷第十譽田天皇「十六年春二月、王仁來之。則太子菟道稚郎

子師之。習諸典籍於王仁。莫不通達。所謂王仁者、是書真等之始祖也。『古事記』應神天皇「又科賜百濟國、若有賢人者貢上。故、受命以貢上人、名和邇吉師。即論語十卷、千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進。此和爾吉師者文真等祖。」

②未詳

③花山院長親『倭片假字反切義解』序文「到於天平勝寶年中、右丞相吉備眞備公、取所通用于我邦假字四十五字、省偏旁點畫作片假字」（天平勝寶年中に到りて、右丞相吉備眞備公、我が邦に通用する所の假字四十五字を取り、偏旁點畫を省きて片假字を作る）。

倭音の説

「倭音」とは日本に伝わる字音のことである。倭音には二種類ある。一つは漢音、二つは呉音である。この二種類の音を異国の音であるということ、昔から習い伝えているが、今日からみれば、いずれも中華の音ではない。その初めはいずれの国の音を受け伝えたのかということはわからない。旧説①によると、「昔、対馬の国に異国からやって来て住みついた尼がいた。その名を法明という。対馬の人は彼女を師として字音を学んだが、とうとう（その字音が）日本国内にひろまり、儒教仏教の書すべてをこの音で読むようになった。その尼は呉国の人であったので、彼女が伝えた音を呉音といい、対馬の国から始まったので、対馬音（とまご）といった。その後、誰かが漢音というものを学んできて、『呉は辺土であり、その音は正しくない、漢音が中原の正音である』と唱えたことから、桓武天皇の延暦十一年に、明経の学生に詔して漢音を習わせ、十七年から五経を漢音で読ませはじめた②。これから儒書には漢音を用い、仏書には呉音を用いるように定められた」という。按ずるに、呉音が「辺土の音である」というのは、周以前の呉国を指している。しかし後世はそうとはいえない。その理由は、呉はもともと南方の荊蛮の国であり、周代春秋の初めまで、その君は中原の諸侯の会同に参加することもなく、その民は断髮文身の

習俗であったので、その語音も正しいはずはなかった。しかしその国はもともと大國であり、春秋の世、王壽夢の時から中原と行き来し、王闔廬になってとうとう覇業を達成した。闔廬は壽夢の孫である。闔廬の子夫差の時に国は亡び、その地は越に併合され、戦国の時になって越も楚に併合された。秦漢以後は、その地を呉郡と名づけ、南方の都会のひとつであった。三国の時、孫氏がここを根拠とした。（この地は）山と海の利を兼ね備え、四方がよりあつまる地であったので、六朝以来、呉郡は天下に並ぶものがないほど繁華となり、人物風流、この地にまさるところはなかった。この頃になると、古の荊蛮の風俗は移り変わり、彬彬たる君子の郷となった。風俗が文雅となれば、語音もそれにしたがって正しくなることは、いずれの国も同じである。明代の南京は古の呉国の地である。南京の音は天下の正音であり、中華の人もこれを手本とした。これが明朝にその地を昇格して南京とし、帝都に准じ、百官を備えてこれを守ってから、学士大夫、搢紳先生が聚まる地となった理由である。しかし明代になって、その土着の音がすぐに改まって、このように正しくなったのではない。秦漢以来、ゆるやかに変化していったのであり、実は南方の風気がそうさせたのである。わが国の人が呉音を受容したのがいずれの世であったのかはわからないが、おもうに応神以後の事であったにちがいないので、六朝の間、もしくは唐の初めに相当する。だからその時の呉音はすでに古の呉音ではないはずである。どうしてこれを賤しめて辺土の音とすることができようか。まことに疑わしい。漢音というのは漢代の京都（みやこ）の音である。漢の都は、前漢は長安、後漢は洛陽である。長安を西京・西都と称し、洛陽を東京・東都と称する。この両都の音を漢音と名づけて、中原の正音としたのである。わが国から使者を派遣して中華に入貢したことは六朝の時にもあったが、唐代になってとりわけ頻繁だったので、その使者を遣唐使といい、中華に往くことを入唐といった。そういうわけでわが国の礼楽文物は唐の制度にならったものが多く、さまざまな芸術も唐から伝わってきたものが多いのである。しかし唐の都も長安であったので、わが国から往った人は、みな長安の音を学んで帰り、それを漢音と称してこの国にひろめたので、桓武の時にな

つて、とうとう世に行われたのである。そもそも吳漢の二音がいつこの国に伝わったのかという説は詳細ではないが、道理から考えると、以上のとおりであると思われる。だから吳音も漢音も、もともと中華の音であるので、たとえ展転としてあやまったとしても、現在のような音になるはずはないのに、今中華南京の正音に照らし合わせると、いささかも似ているところがないのはなぜであろうか。當初、いづれの国の音を誰から受けて、それを中華の音だとおもって習い伝えたのであろうか。いぶかしい事である。中華の音は、韻書にあるように、四声七音、清濁開合、種々の呼法、韻がそれぞれ別であつて、はなはだ精微である。この国は四声はわかれず、七音は明らかではなく、清濁開合の呼法は正しくなく、衆音混同してまったく区別がない。これは倭語を用いてその意味を辨別し、字音を用いなかつたからである。しかし千年あまり、このように習い覚えてきた音であるので、今これを改めて中華の正音にもどすべき術すべもないので、とりあえず古来の習慣どおりにふた通りの音を学んで、文字をおぼえ、書を読むべきである。ただしこの音を中華の音と考へてはならない。当初は中華の人から伝授されて、真の吳音、真の漢音であつたはずであるが、今ではこのようにあやまり変化してまつたくわが国の音となり、（本来の）中華の音ではないので、とりあえずこれを「倭音」という。もし真の華音を知ろうとおもへば、その師について問わなければならず、筆札で書きあらわすのはむづかしい。

①『對馬康銀記』「欽明天皇之代、佛法始渡吾土。此島有一比丘尼、以吳音傳之、因茲日域經論皆用此音。故謂之對馬音」（欽明天皇の代、佛法始めて吾が土に渡る。此の島に一比丘尼有り、吳音を以て之を傳へ、茲に因りて日域の經論皆此の音を用ふ。故に之を對馬音と謂ふ）。

『韻鏡袖中秘傳鈔』七「然レ共第三十主欽明天皇ノ朝二佛法入リシヨリ後、百濟ノ法明ト云フ尼、對馬嶋ニ來テ維摩經ヲ誦讀ス。是レヨリ吳音ヲ謂ヒテ、對馬讀ト言イヒナラハ俗セリ」。

②『日本紀略』「延曆十一年十一月勅、明經之徒不可習讀吳音、發聲誦讀、既

致訛謬、熟習漢音」。「延曆十七年戊寅二月十四日、太政官宣、一諸讀書出身人等、皆令讀漢音、勿用吳音」。

倭語の説

「倭語」とは日本の人の言語のことである。倭語には五種類ある。一つは天地自然の倭語。人類が誕生して以来、応神天皇の世までの、文字がなかった時のわが国の人の言語である。これは真の倭語である。今いづれの言葉がその遺留であるかということはわからない。二つは異国と往来を通じてからあとの倭語。わが国のあらゆる事物は、異国から伝わってきたものが多いので、この事、この物が存在したあとにそれぞれ名をつけたのである。三つは文字があつてからあとの倭語。中国の文字が行われるようになり、その文字を読むにしたがつて、この国にはない事物であるが、他の事物に準じて倭訓を施した。羊ヤウを「ひつじ」と訓じ、豹ハウを「なかつかみ」と訓じ、象ザウを「きさ」と訓じ、棠棣タウダイを「からなし」と訓じる類である。四つは華音から来た倭語。中華の人の言語をそのまま受容して用いたものである。火カを「ほ」と訓じ、馬バを「むま」と訓じ、君ケンを「きみ」と訓じ、蟬センを「せみ」と訓じ、梅バイを「むめ」と訓じる類は、もともといずれも華音である。火を「ひ」というのは、「ほ」から転じたものである。五つは三韓の語から来た倭語。上世は三韓と頻繁に往来を通じていたので、三韓の人の言語をそのまま倭語としたのである。虎コを「とら」と訓じるのは高麗の語であるという人がある①。この類はまだたくさんあるにちがいない。この五種類のほかに、さらに古語、今語、雅語、俗語がある。さらに仮名草子の語と、經史詩文に用いる倭語には同じでないものがある。以上のさまざま倭語は、ひとつひとつその来源を考へるのはむづかしい。今われらが朋輩の学者が、中華の文字に通じ、中華の言語に通曉し、經術を明らかにし、文章を作ろうと志す以上は、無理やり倭語を講究する必要はないが、この国の人でありながらこの国の言語にうといのも、学者として恥ずべきことである。ましてや今の人は、識字は以呂波から始まり、読書は倭語から入っているので、これを考へることも学問の一助で

ある。ただ習俗にまどわされず、典則を失わず、鄙俗から遠ざかることを考えるべきである。倭語は王仁から始まるという説はもとも信じがたい。王仁がはじめてわが国にやってきて、中華の書を授けた時、いち早く倭語に通じて、中華の文字をひとつひとつ翻訳して倭語とすることは容易ではない。しかし難波津の歌②を觀れば、この国になく住み、後には倭語に通曉したとみえる。だから王仁が書を授けたというのは、彼の国の説法を授けただけであって、今のような倭語の読みは後の人が行なったことであるにちがいない。

①『萬葉集』十六有由縁并雜歌「乞食者詠」「韓國乃虎云神乎齊取爾」（カラクニノトラトフカミライケドリニ）。

②『古今和歌集』假名序

難波津の歌は、帝の御初めなり。

〔古注〕大鷦鷯の帝、難波津にて皇子と聞えける時、春宮をたがひに譲りて位に即きたまはで、三年になりければ、王仁といふ人の訝り思ひて、よみて奉りける歌なり。木の花は梅の花をいふべし。

大鷦鷯の帝をそへ奉れる歌。

難波津に咲くや木の花冬こもり 今は春べと咲くや木の花

といへるなるべし。

顛倒の読みは文義を阻害する説

「顛倒」とは、さかさまであることをいう。日本の人の言語はすべてさかさまである。中華の人が「治國平天下」というのを、日本の人は「國を治む、天下を平らにす」といい、中華の人が「無所不至」というのを、日本の人は「至らざる所なし」というような類である。中華の人が先にいうことを（日本の人は）後にいい、中華の人が後にいうことを（日本の人は）先にいう。そもそも言語すべてがこのように上下顛倒する。このような顛倒はわが日本だけのことではない。中華以外では、東夷・西戎・南蛮・北狄、言語はそれぞれ異なるが、顛倒しないものはない。今わが

国の人は、中華の書をこの国の語として顛倒して読むので、文義を阻害することが多い。上古にはこのようなことはなく、中古以来のことであるにちがいない。その理由は、王仁が始めてわが国の人に書を授けた時は、倭語の数も少なく、王仁は異国の人であり、この国の言語に通じることがむづかかったので、ただ異国の音で異国の読みを教えたにすぎない。その後、中華の書がたくさん伝わり、文字の教えがひろまり、物の名も定まり、言語の数も多くなり、中華の文字が民間にまで通行した。これによって学士大夫をはじめとして書を読むものは、中華の文字を翻訳し、倭語としてこれを読んだ。しかし倭語で中華の書を読むには、その文を顛倒しなければその意味が通じないので、とうとう顛倒の読みとなったのである。これがいづれの時に誰が創めたのかということはいわれないが、世間では吉備公から始まったといわれている①。吉備公が片仮名を造ったのは、倭語を書くのに便利なようにするためであったのであれば、（彼が）倭語の読みを創めたということも、いかにもそのとおりであるにちがいない。倭語で中華の書を読んでしまえば、異国の事をわが国の事を見るように感じ、この国の人にとってこれははなはだ便利であるので、国内の人はもっぱらこれを学び、古の説法を尋ね求めるものもいなくなった。そこで吉備公の前はいかなる説法であったのかということさえ伝わらなくなった。中華の文字はむなく意味のわからない外国語や鳥の鳴き声の役にしかならず、文章の道はここから方向をあやまってしまった。（片仮名を作ったという）吉備公の功績もその罪をおおいかくすのはむづかしい。今の学者は幼いころから顛倒の読みを習い、華語を理解していないので、このように（顛倒して）読んでその意味が通じるとおもいこみ、倭語が義理をとでも阻害していることに気づいていない。そもそも言語の道は中華とわが国とはまったく異なる。中華の書は中華の人の言語であり、（日本の人が）日本の人の言語でこれを読めば、日本の人の言語となら異なるところはなくなる。華語は上にある場合と下にある場合によって、同じ字であってもその意味は異なる。「不敢」といい、「敢不」というのは、「敢」の字が「不」の字の下にあったり、「不」の字の上にあったりして、「不敢」と「敢不」の意味はまっ

たく正反対である。しかし倭読では「あへて」をかならず先にいうので、「不敢」と「敢不」とが混乱する場合がある。「不必」と「必不」も同様である。さらに上にある一字一句が下の数字数句にかかるところがあるが、これを顛倒して読めばかならずその意味を失する。さらに顛倒して読もうとしても読みにくいところがある。さらに中華は言語の数が多く、日本は言語の数が少ない。少ない言語を多い言語に対応させるので、字義が明確ではない。たとえば中華の人は、目でみることを「視」といい、「觀」といい、「覽」といい、「察」といい、「監」といい、「瞻」といい、「矚」といい、「瞰」といい、「相」といい、「見」といい、「觀」といい。このように（中華には）さまざまの言葉があつて、その指す事柄がそれぞれ異なっているのに、わが国の人はそれを「みる」というひとつの言葉でおわらせてしまう。耳で大きくことを「聽」といい、「聆」といい、「聞」というのに、わが国の人はそれを「きく」というひとつの言葉でおわらせてしまう。あらゆる言葉がすべて同様である。物の名にしても、「爵」「觴」「觥」「卮」「杯」「盞」はいずれも酒器であり、その形制はそれぞれ異なるのに、わが国ではそれを「さかづき」というひとつの名で通用して、その物が同じでないことをわかっていない。万事すべてこの類である。さらに倭読では助語辞を捨てて読まないで、あらゆる助字は無用の字となり、自然に華語の意味を失してしまふ。今の世の儒者はたくさん書を読み、経術を議論することができ、すこぶる発明するところがあるが、古人の語に対して、靴を隔てて痒いところを搔くようにもどかしいのは、倭語の習慣、顛倒の弊害が不治の病となつて、その靈智をおおいかくしているからである。口で話す場合ですらこうである。ましてや文章を作る場合は、倭語の習慣が除かれなければならないが字義を誤り、顛倒の弊害がなくならなければかならず文理にそむく。著述が多いといつてもならぬ役に立たず、苦勞ばかりあつてならぬ効果はない。これが日本の学者の大きな欠点である。とすれば吉備公が国字を造り、倭語顛倒の読みをはじめたのは、後世の学者に甘い毒をくらわせたのではないだろうか。この毒は人の骨髓に滲みこみ、取り除くのはむづかしい。もしこれを取り除こうとおもえば、華語を習うのが最善の方

法である。華語とは中華の俗語であり、今の唐話である。だから文学に志す者はかならず唐話を学ばなければならない。

- ①「顛倒の読みは吉備公から始つた」という説は未詳。ただ荻生徂徠『學則』一に「黄備氏といふ者出づることあり、西のかた中国に學び、和訓を作為して、以て国人に教ふるも、またなほ乳に易ふるに殻を以てし、虎はすなはち菟にして、その讀みを顛倒し、錯へてこれを綜べ、以て二邦の志を通ず。ここにおいてか吾これを侏儻鳩舌と謂ひし者、吾視ることなほ吾のごとし。これすなはち詩書禮樂の教へたるや、庶はくは以てこれを海表に被らしむるに足らんか。黄備氏の、東方に功德あるは、民今に至るまでこれに頼る」とある。

倭音の正誤

そもそも字音は人の語音である。人は生れると言葉を発する。言葉が発すると声がある。「声」が文を形成する、これを音という①。音があつてはじめて字がある。字は言語が現象としてあらわれたものである。人の語音には四声があり、七音があり、軽重清濁があり、開合があり、韻がある。「四声」とは平声・上声・去声・入声である。人の語音に四声があるのは、天に四時があるのと同じであり、これは自然の摂理である。しかし夷狄には四声が備わっておらず、中華の人だけに四声は備わっている。「七音」とは唇、舌、牙、齒、喉、舌齒、齒舌である。人の声はこの七つの場所から発して、七種類の音となる。これが羽、徵、角、商、宮、半徵、半商である。この七音は音の色である。七音にそれぞれ清濁があり、清濁がさらにわかれて四つとなる。一つは清音、二つは次清音、三つは濁音、四つは清濁音である。唇音には軽重があり、舌音には舌頭・舌上の二音がある。齒音には齒頭、正齒、細正齒の四音がある。「開合」は呼法である。細かく分ければ、開口、合口、閉口、撮口、齊齒、捲舌、混呼の七種類の呼法がある。「韻」というのは音のなりをいう。「なり」とは形である。さまざまの韻書に掲載されているものは、平声を上下に分け、

上平は一東から二十八山まで、下平は一先から二十九凡まで、上声は一董から五十
五范まで、去声は一送から六十梵まで、入声は一屋から三十四乏まで、四声合計し
て二百六韻である。これは梁の沈約が定めた韻法である。この二百六韻にそれぞれ
七音があり、清濁輕重があり、千變万化の音となる。華音にはこのような区別があ
り、はなはだ精微である。倭音には四声・七音・清濁・開合という名称はあるが、
実態はない。(なぜならば)字音があやまって、中華の正音ではなくなったからであ
る。僧家では倭音を四声に分けることがあるが、これは無用の行いである。その理
由は、平声の支脂之微魚虞模歌戈麻、あわせて十韻、上声の紙旨止尾語麌姥咍果馬、
あわせて十韻、去声の眞至志未御遇暮箇過禡、あわせて十韻、三声あわせて三十韻
は、倭音では響きがなく、華音の入声と同じである。これを平上去の三声ではどの
ように読むことができようか。入声は、倭音にはかえってフツクチキの響きがあり、
入声の体裁を失っている。これはいずれも鳥の鳴き声のように正しくない音である。
どうして四声に分けることができようか。教相を説く釈氏の家に四声を点じる方法
がある。その方法は、漢音は通常どおり、呉音は、平声の字を点じて上声・去声と
し、上去二声の字を点じて平声とする。これはもつともいわれない事である。呉
音も漢音もともと中華の音であるが、展転としてあやまり、現在の倭音となった
だけであって、四声は依然として四声である。どうして呉音だけ平仄がその位置を
かえることがあるのか。奇怪の至りである。だから倭音には四声はないことがわか
る。そもそも今の学者は、皆倭読を習う者なので、倭音をしっかり記憶することに
努めなければならない。まず漢音を学び、次に呉音を学び、そのいずれにも習熟し
なければならない。儒書には漢音を用い、仏書には呉音を用い、それ以外の書には
呉音漢音兼用して読むことが、昔から代々伝わることなので、これに従うべきこと
は当然である。しかし二音いづれも中華の正音でないのであれば、混用したとして
も何の不都合なことがあるのか。かならずしもこれに拘泥する必要はない。まして
や俗間では二音が並行して用いられているので、書を読む者は通例に拘泥して、人
の耳目を驚かせてはならない。字音を正そうとして、人の耳目を驚かせるのは、風

雅なやり方ではない。もはやこれは倭音であり、正したとしても結局何の益がある
うか。ただ耳にさわらず、聴きにくくないように書を読まなければならない。もし
字音を正そうと考えるのであれば、音韻の学を学ばなければならない。音韻の学は
華音でなければ明らかにならない。今の人が華音を知らずに字音を議論するのは、
癡人が夢を語るようなものである。華音とは俗にいう唐音である。志を有する者は、
余裕があればこれを学ぶとよい。大抵倭音は古から継承してきており、呉音・漢音
にそれぞれその例がある。平声の一東から入声の三十四乏まで、一韻の内て例に照
して類推すれば、條理はおのづと理解できる。時には例に食い違う音はあるが、古
来読み習わしている音を改めないのが古くからのならわしである。清濁・開合につ
いては、正を失うことがとりわけ多いので、ことごとく改めてはならない。その
うち字義に関することは、世間の趨勢に背いたとしても絶対に改めなければならない
い。たとえ俗儒があやまった音があつても、これを正して人を驚かすことにならな
ければ改正しなくてもよい。今倭音があやまって読み、意味を阻害する字をいくつ
か挙げて、初学に示す。

① 『禮記』樂記「聲成文謂之音」。

上平

彤 廣韻に「以戎の切」、音融、倭音イウ。尚書に高宗彤日という篇があり、その註
に「音容」とある①のを見て、倭音でヨウと読むのは非である。華音では東冬
の二韻は通じており、融と容は同音である。しかし倭音ではこの二韻はそれぞ
れ別であり、融と容は音が異なる。東の韻にヨウという音はない。

② 『尚書』高宗彤日、蔡傳に「彤音容」とある。

馮 人の姓である。戦国の時、齊に馮驩①があり、漢代に馮唐②がある。さらに諸

馮は地名③である。孟子に見える。字はもともと東の韻に入る。廣韻に「房戎
の切」、颯・颯と同音。倭音フウ、もしくはホウであるべきだが、古来フと読
み習わすのは誤りである。しかし今では改めるのはむづかしい。ヒヨウと読む
のはとりわけ非である。姓と地名以外は音憑で、蒸の韻に入る。倭音ヒヨウ。

漢音は清み、呉音は濁る。倭語に「よる」と訓じ、「たのむ」と訓じるのは、憑の字と同じ。論語の「暴虎馮河」④、毛詩の「削屨馮馮」⑤、左傳の「震電馮怒」⑥、漢の「左馮翊」⑦、いずれも音憑である。馮夷の馮もこれと同じ。馮夷は水神の名⑧であり、馮は姓ではない。文選の註に音憑とあり⑨、フと読んではならない。

- ①『史記』孟嘗君列傳第十五「初、馮驩聞孟嘗君好客、躡屣而見之」。
- ②『史記』張釋之馮唐列傳「馮唐者、其大父趙人。父徙代。漢興、徙安陵」。
- ③『孟子』離婁下「舜生於諸馮、遷於負夏、卒於鳴條。東夷之人也」。
- ④『論語』述而「子曰、暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也。必也、臨事而懼、好謀而成者也」。
- ⑤『詩經』大雅・緜「築之登登、削屨馮馮」。
- ⑥『左傳』昭公五年「今君奮焉、震電馮怒」。
- ⑦「左馮翊」は官名、太初元年に左内史から改称された。『漢書』百官公卿表「武帝太初元年、……左内史更名左馮翊」。
- ⑧『廣雅』釋天「河伯、謂之馮夷」。
- ⑨未詳

充 廣韻に「昌終の切」、倭音シウ。清んで読むべきであるが、古来濁って読み習わすのは誤りである。しかし今では改めるのはむづかしい。

聾 廣韻に「盧紅の切」、籠・隴・權と同音、東の韻に入る。倭音ロウ。龍の字の音で読むのは非である。龍は冬の韻に入る。漢音リョウ、呉音リウ。倭音では東の韻にリョウの音はない。

芄 (廣韻に)「音蓬、又音馮」。いずれも東の韻に入る。華音には軽重の区別があるが、倭音はいずれもホウであり、軽重はない。毛詩に「芄芄たる其の麥」①とあるが、ハンと読んではならない。

- ①『詩經』鄘風・載馳「我行其野、芄芄其麥」。

右、東の韻

松 倭音ショウ。松江を俗儒がズンガウと読むのは非である。ズンは華音のあやまりである。倭読は倭音を用いて読むのが昔からのならわしである。松江の松に限って華音を用いるのはなぜか。禪家に松坡という者があり、今ズンパと読むからである。そもそも倭読に華音を雑えるのは、すべて禪家の僧の読み習わしである。儒者はまねをしてはならない。

邕 廣韻に「於容の切」、音雍。字は冬の韻に入る。漢音ヨウ、呉音イウ。後漢の蔡伯喈の名①を、俗儒がイウと読むのは呉音である。字が邕に従うので、音邕であると考えるのは誤りである。邕は入声、倭音はイフである。

- ①『後漢書』蔡邕列傳第五十下「蔡邕、字伯喈、陳留圉人也」。

濃 廣韻に「女容の切」、醴・穠と同音、倭音チョウ。字は冬の韻に入り、東の韻に入らない。虎關の聚分韻略①がこの字を誤って東の韻に入れており、今、詩を作るものが東の韻でこの字を押韻するのは非である。古詩ではとりの韻を通押するが、近体ではとりの韻を通押することは許されない。

- ①虎關師鍊は鎌倉時代後期から南北朝にかけての学僧。『聚分韻略』は虎關によつて編纂された韻書である。嘉元四年（一一三〇六）の自序がある。

慵 廣韻に「蜀庸の切」、倭音ショウ。慵・慵の二字はこれと同音である。廣韻の慵の字の註に「又音庸」とある。今の人は庸の音しか知らず、本音が「蜀庸の切」であることを知らない。

右、冬の韻

瀧 廣韻に「呂江の切」。字は江の韻に入る。倭音ラウ。龍の字の音に読むのは非である。廣韻にはさらに「音雙」とある。

逢 廣韻①に「薄江の切」、倭音ハウ。姓である。孟子に逢蒙②があり、左傳に逢丑父③がある。さらに關龍逢は夏の桀の時の忠臣の名④である。この字は逢迎の逢と似ているが、字体音義すべて異なる。逢迎の逢は冬の韻に入り、この字は江の韻に入る。混同してはならない。

- ①『廣韻』には「逢、姓也。出北海。左傳、齊有逢丑父」とある。

②『孟子』離婁下「逢蒙學射於羿、盡羿之道、思天下惟羿爲愈己、於是殺羿。孟子曰、是亦羿有罪焉。」

阮元『校勘記』「逢蒙」の項に「按ずるに逢字は彖に从ふ。逢蒙、逢伯陵、逢丑父、逢公、皆薄紅の反。東轉じて江と爲す。乃ち薄江の反。：宋人廣韻字を改めて逢、薄江の反に作るは殊に謬る。：逢蒙、古書譌蒙に作れば、則ち其の字當に彖に从はざることを知る可し」とある。

③『左傳』成公二年「癸酉、師陳于鞏。邴夏御齊侯、逢丑父爲右。晉解張御卻克、鄭丘緩爲右。」

④『莊子』人間世第四「且昔者桀殺關龍逢、紂殺王子比干、是皆修其身以下僂拊人之民、以下拂其上者也、故其君因其修以擠之、是奸名者也。」

右、江の韻

義 廣韻に「許羈の切」、倭音キ。清んで読まなければならない。尚書の義和①、晋の王羲之②、唐の儲光羲③、いずれもこの字である。字体が仁義の義に似ているので、俗儒は濁音に読むが、これは非である。学者は字体をよく理解しなければならぬ。義の字は牙音の去声、この字は喉音の平声であり、華音はまったく異なる。倭音は平仄を区別せず、二音は似ており、清濁があるだけである。犧・犧の二字はいずれもこの字に従い、これと同音である。いずれも清んで読まなければならない。

①『尚書』堯典「乃命羲和、欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時」、注「羲氏和氏、世掌天地四時之官」。

②『晉書』列傳第五十一「王羲之、字逸少、司徒導之從子也」。

③『唐才子傳』卷二「儲光羲、光羲兗州人。開元十四年嚴迪榜進士」。

麗 高麗の麗、魚麗の麗、いずれも支の韻に入る。廣韻に「呂支の切」、離・驪と同音、倭音リ。高麗を倭音ライと読むのは誤りである。

衰 盛衰の衰は「所追の切」、等衰の衰は「楚危の切」。いずれも支の韻にあるが、華音では別である。倭音はいずれもスイであり、異ならない。晋の趙衰は、等

衰の衰である。俗儒が左傳の註に「初危の反」①とあるのを見て、倭音シと読むのは誤りである。危の字は合口呼の字であり、華音はグイであるので、「初危の反」はスイである。榱の字も、廣韻には盛衰の衰と同音である。孟子の「榱題數尺」②は、朱註に「榱は楚危の反」③とあり、俗儒が倭音シと読むのは誤りである。

①『左傳』僖公二十三年「遂奔狄。從者狐偃、趙衰、顛頡、魏武子、司空季子」、杜注「衰、初危反」。

②『孟子』盡心下「孟子曰、說大人、則貌之、勿視其巍巍然。堂高數仞、榱題數尺、我得志、弗爲也」。

③朱子『孟子集注』「榱、楚危反」。

倭音

音麤。廣韻に「儒佳の切」、倭音スイ。濁って読まなければならない。俗儒が清んで読むのは、字体が綏に似ているので、誤って混同したのである。綏は息遺の切、倭音スイ、清んで読む。古書に綏の字を綏に作ることがあるのは、字形が似ているので誤ったのである。

右、支の韻

車 この字はもととも麻の韻に入る。廣韻に「尺遮の切」、倭音シヤ。さらに魚の韻に入る。「九魚の切」、音居、倭音キヨ。二音の意味は異ならない。古の歌詩の韻には居の音を用いたところが多い。子車氏の「車」を、左傳の註疏では居の音に読む①。毛詩の註疏には音註がない②。字彙には本音の下に掲出する。さらに字彙には居の音の下に、「戎車」「革車」を掲出する③が、なにを根拠としたのかわからない。字彙にはさらに「古は遮の韻しかなく、漢以來、始めて居の音がある」④という。だから歌詩の韻に居の音で押韻するところ以外は、すべて本音で読まなければならない。今の人が論語の「大車」⑤を居の音で読むのは非である。

①『左傳』文公六年「秦伯任好卒。以子車氏之三子奄息、仲行、鍼虎爲殉、皆秦之良也。國人哀之、爲之賦黃鳥、《經典釋文》「車音居」。

- ② 『詩經』秦風・黃鳥「交黃鳥、止于棘。誰從穆公、子車奄息。」
- ③ 『字彙』丙集「又斤於切、音居。戎車、戰車也。革車、輜車也。」
- ④ 『字彙』丙集「古惟遮韻、漢以來、始有居音。」
- ⑤ 『論語』爲政「子曰、人而無信、不知其可也。大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。」

右、魚の韻

娛 虞・愚と同音。倭音グ。今の人がゴと読むのは、字体を見て誤ったのである。廣韻に「測隅の切」、倭音スウ。孟子の「芻蕘の者往く」①を、俗儒が朱註に「芻音初」②とあるのを見て、倭音シヨと読むのは非である。初の字は魚の韻に入る。華音では魚・虞の二韻は通じる。倭音では虞の韻にシヨの音はない。

- ① 『孟子』梁惠王下「曰、文王之圃方七十里、芻蕘者往焉、雉兔者往焉、與民同之。民以爲小、不亦宜乎。」
- ② 朱子『孟子集注』「芻音初」。

巫 音無、漢音ブ。濁って読む。俗儒が清んで読むのは非である。呉音はムである。誣の字もこれと同じ。

須 廣韻に「相愈の切」、倭音シユ、さらにスウと読む。いずれも古来の読みである。仏家ではスウの音を用いない。

需 周易に需の卦がある①。音須。廣韻に「相愈の切」、倭音シユ。清んで読むべきであるが、古来濁って読み習わしている。儒・濡・濡・濡・濡の五字はいずれも人朱の切、倭音シユ。濁って読む。

- ① 『周易』「需有孚、光亨貞吉、利涉大川。」

愈 倭音ユと読むのが本音である。平上去の三声に通じる。さらに輪の音がある。倭音シユ。漢の欒布が封ぜられた国の名①である。さらに人身の愈穴の愈は脛と同じ。音輪の去声。あるいは輪に作る。史記の扁鵲傳に「五藏の輪に因る」②とあるのを、索隱に「東注の反」と註する。輪の字には平去の二声があり、この時は去声である。しかし世の医書を読む者は、愈の字を本音のように読み、

シユと読まない。輪の音があることをわかっていない。

- ① 『史記』季布欒布列傳第四十「吳軍反時、以軍功封愈侯。」
- ② 『史記』扁鵲倉公列傳第四十五「二撥見病之應、因五藏之輪、乃割皮解肌、訣脈結筋、擗髓腦、撲荒爪、熨、湔滌腸胃、漱滌五藏、練精易形。」索隱「音束注反。」

輪

廣韻に「式朱の切」、倭音シユ。孟子の公輸子をユと読む俗儒がある。字体によって誤ったのである。仏書に「耶輸多羅女」①がある。釈氏の徒はシユと読む。

- ① 中印度迦毘羅城釋種執杖の子、執達太子の正妃、羅睺羅の生母。『阿羅漢具德經』に「良因を宿植して大福德を具するは、羅睺羅の母、耶輸陀羅苾芻尼、是れなり」とある。

徒 倭音ではトと読むのが常である。明法家のむかしからのならわしに、律の「杖・徒・流・死」①の「徒」をツと読むのは、華音がのこっている。

- ① 『隋書』刑法志「其刑名有五。一曰死刑、二曰流刑、三曰徒刑、四曰杖刑、五曰笞刑。」

烏 廣韻に「哀都の切」、倭音ヲであるべきであるが、古来ワと読み習わすのは、華音が遺っているのである。今かならずしも改めない。烏獲・烏江の烏を、俗儒がワウと読むのはいわれがない事である。

都 倭音ではトと読むのが常である。ツと読むことがあるのは華音がのこっている。右、虞の韻

- 淮 廣韻に「戸乖の切」、懷・槐と同音。倭音ではクワイであるべきだが、古来ワイと読み習わすのは華音がのこっている。呉音はエである。

右、佳の韻

煨 廣韻に「烏恢の切」、音隈、倭音ワイ。醫家がワイと読むのは華音である。嵬 廣韻に「五灰の切」、倭音グワイ。濁って読まなければならない。俗儒が清んで読むのは非である。

推 推轂・推敵の推、手にておす類は灰の韻に入る。廣韻に「他回の切」、倭音タ

イである。スイと読んではならない。法華経の「推落大火坑」①を、釈氏の徒がスイと読むのは誤りである。

①『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五』「假使興害意、推落大火坑、念彼觀音力、火坑變成池」(假使害ふ意を興して、大なる火坑に推落するも、彼の觀音力を念ぜば、火坑は變じて池と成らん)。

右、灰の韻

諄 廣韻に「章倫の切」、倭音シユン。清んで読まなければならない。俗儒が濁つて読むのは非である。醇・鶉・淳の三字は純・尊と同音であり、濁つて読む。字体が類似しているので、誤つて音を混同したのである。

遵 廣韻に「將倫の切」、倭音シユン。清んで読まなければならない。濁つて読むのは非である。

右、眞の韻

軍 音君。廣韻に「舉云の切」、倭音クン。清んで読むべきであるが、古来濁つて読み習わすのは、君の字の音を避けたのであろう。今では改めるのはむづかしい。

右、文の韻

灘 廣韻に「他干の切」、音嘆の平声、倭音タン。清んで読むべきであるが、濁つて読む人が多いのは、難の字と混同したのである。灘の字はこれと同音である。

豌 廣韻に「一丸の切」、音剣、倭音ワン。字は寒の韻に入る。豌豆は豆の名である。俗にエンドウと呼ぶ。エンの音はあやまりである。

右、寒の韻

下平

咽 廣韻に「烏前の切」、音煙、倭音エン。先の韻に入る。人の咽喉である。今医書を読む者がインと読むのは、字体によつて誤つたのである。

鞭 廣韻に「卑連の切」、倭音ヘン。清んで読まなければならない。和漢朗詠集に「刑鞭蒲腐て螢空しく去る」①というのを、昔から清んで読むのは正しい。今の人

が濁つて読むのは非である。

①『和漢朗詠集』卷下、帝王「刑鞭蒲腐て螢空去、諫鼓苔深鳥不驚」(刑鞭蒲腐ちて螢空しく去る、諫鼓苔深くして鳥驚かず)。

員

廣韻に「王權の切」、音圓、倭音エン、先の韻に入る。物の数・官の数であり、幅員である。さらに方圓の圓と通じる。さらに音云、文の韻に入る。語助である。さらに音運、問の韻に入る。伍子胥の名①である。この二音はいずれも倭音ウンである。官員の員を、俗儒がインと読むのは非である。三音以外にインという音はない。官員の員は、先の韻に入り、圓の音であるので、倭音ではエンと読まなければならない。官名に員外郎がある。

①『史記』伍子胥列傳第六「伍子胥者、楚人也、名員。員父曰伍奢。員兄曰伍尚。其先曰伍舉、以直諫事楚莊王、有顯、故其後世有名於楚」。

右、先の韻

澆 廣韻に「堅堯の切」、音梟、倭音キヤウ。清んで読まなければならない。俗儒が濁つて読むのは、字体によつて誤つたのである。

僥 僥幸の僥、微と通じる。音澆。清んで読まなければならない。僥僥の僥は音堯。廣韻に「五聊の切」。僥僥は国名、家語に見える①。

①『孔子家語』辨物第十六「孔子曰、僥僥氏長三尺、短之至也」。

營 聊・遼・寥・寮と同音、倭音リヤウ。毛詩の「其の血膂を取る」①を、俗儒が勞の音で読むのは、形が似ていることによつて誤つたのである。蕭の韻にラウの音はない。

①『詩經』谷風之什・信南山「祭以清酒、從以騂牡、享于祖考。執其鸞刀、以啓其毛、取其血膂」。

軺 廣韻に遙・韶の二音がある。倭音ヤウ、ジャウ。字彙には韶じやうの音を掲載しない。文選の註にも遙の音を掲載する①。

①未詳

右、蕭の韻

梢 廣韻に「所交の切」、鴞・管・蛸と同音、倭音サウ。肴の韻に入る。俗儒がシヤウと読むのは呉音である。

鈔 廣韻に「楚交の切」、音謙、漢音サウ、呉音シヤウ。古来呉音を用いる。抄の字はこれと同じ。俗字である。

嘲 廣韻に「陟交の切」、音嘲、倭音タウ。俗儒がチヤウと読むのは呉音である。揚雄の文に解嘲①がある。

①揚雄『解嘲』『文選』卷四十五「人有嘲雄以玄之尚白、雄解之、號曰解嘲」。

右、肴の韻

醪 廣韻に「魯刀の切」、勞・牢と同音、倭音ラウ。俗儒がリヤウと読むのは、字体によって誤ったのである。

右、豪の韻

娑 廣韻に「素何の切」、倭音サ。字は歌の韻に入る。釈氏の徒がシヤと読むのは、字体によって誤ったのである。歌の韻にシヤの音はない。俗儒が釈氏にならつて（シヤと読む）のはさらに非である。娑の字はこれと同音である。

莎 廣韻に「蘇禾の切」、蓑・梭と同音。上の娑の字と、音は似ているが同じではない。娑は開口呼、莎は合口呼であり、華音では別である。倭音は娑と同じ。俗儒がシヤと読むのは誤りである。

右、歌の韻

嗟 廣韻に「子邪の切」、音賈。倭音はシヤであるべきだが、古来サと読み習わしている。今では改めるのはむづかしい。

鼈 蛙と同じ。廣韻に「烏瓜の切」、倭音はワであるべきだが、古来アと読み習わしている。今では改めるのはむづかしい。蜺鼈は人の名、孟子に見える①。庶・注・窪・哇、汗尊の汗はこれと同音である。汗尊は、禮記の禮運に見える②。

①『孟子』公孫丑下「孟子謂蜺鼈曰、子之辭靈丘而請士師、似也、爲其可以言也」。

②『禮記』禮運「夫禮之初、始諸飲食、其燔黍捭豚、汗尊而抔飲、蕢桴而土鼓、猶若可以致其敬於鬼神。及其死也、升屋而號、告曰、皋。某復」。

右、麻の韻

坊 この字は廣韻には房・方の二音がある。清んで読んでも、濁って読んでも、いずれも可である。倭音はパウ、ハウである。

襄 廣韻に「息良の切」、廂・湘・相・細・箱・箱・箱と同音、漢音シヤウ、呉音サウ。いずれも清んで読むべきであるが、古来濁って読み習わすのは誤りである。しかし今では改めるのはむづかしい。纒・襻・襻・襻・襻の五字はこれと同音である。

嘗

廣韻に「市羊の切」、音常、倭音シヤウ。濁って読むべきだが、常に清んで読んでも害はない。しかし「衲禘嘗蒸」の嘗は、かならず濁って読むなければならない。倭音が蒸の字と混乱するからである。我が朝の礼に、大嘗会・新嘗会がある。嘗の字はいずれも濁って読み習わしている。裳・縿の二字はこれと同音である。

右、陽の韻

榮 水名である。廣韻に「戸扇の切」、榮・螢と同音、倭音ケイ。今はエイと読む人があるが、あやまりであるようである。しかし字彙に「于平の切、音榮」①とあれば、誤りでもないと思える。榮・螢の二字と榮の字は、華音は同じだが、倭音は別である。

①『字彙』曰集「榮、于平切、音榮、水名」。

右、青の韻

蒸 廣韻に「蓑仍の切」、倭音シヨウ。清んで読まなければならない。俗儒が濁って読むのは非である。蒸の字はこれと同音である。

右、蒸の韻

硫 硫黄である。廣韻に「力求の切」、劉・留・流と同音。漢音リウ、呉音ルであるべきだが、古来ユと読んだり、イと読んだりするのは、いずれも非である。し

かし葉の名であり、世俗に通行する音であるので、今では改めるのはむつかしい。

右、尤の韻

龕 廣韻に「口含の切」、堪・戡と同音、倭音カン。清んで読むべきであり、古来濁つて読み習わすのは誤りである。

右、覃の韻

上声

髓 廣韻に「息委の切」、倭音スイ、清んで読むべきだが、古来濁つて読み習わす。

隨の字に類似しているので誤ったのである。

跬 廣韻に「丘弭の切」、音類、倭音キ。字は紙の韻に入る。俗儒がケイと読むのは、

字体に圭の字があるのを見て誤ったのである。

時 廣韻に「諸市の切」、音止、倭音シ。清んで読まなければならない。しかし廣韻に「時止の切」ともあるので、濁つて読んでもよい。

右、紙の韻

甫 廣韻に「方矩の切」、斧・俯・府と同音。倭音フであるべきだが、古来ホと読み習わしている。今では改めるのはむつかしい。脯・簠・黼の三字もこれと同音である。

輔 廣韻に「扶雨の切」、父・腐・釜と同音。倭音フであるべきだが、古来ホと読み習わしている。今では改めるのはむつかしい。ただ我が朝の八省の太輔・少輔は、古来フと読み習わしている。父母の父はこれと同音である。「尼父」^{ニハ}「尚父」^{シヨウハ}の父は、上の甫の字の音である。

虜 廣韻に「郎古の切」、魯・鹵と同音。字は麋の韻に入る。倭音はロである。俗儒がリヨと読むのは誤りである。麋の韻にリヨの音はない。虜の字もこれと同音である。

五 廣韻に「疑古の切」、音午。字は麋の韻に入る。倭音ゴ。ギヨと読む俗儒がある

が、非である。麋の韻にギヨの音はない。

澠 廣韻に「呼古の切」、音虎。字は麋の韻に入る。倭音コ。俗儒がキヨと読むのは、字体によって誤っている。麋の韻にキヨの音はない。水滸傳は書の名であり、コと読む。

普 廣韻に「滂古の切」、音浦、漢音ホ、呉音フ。今は呉音を用いることが多い。溥の字はこれと同音である。毛詩の「溥天の下」①、中庸の「溥博淵泉」②は、いずれもフと読み習わしている。

①『詩經』小雅・北山「溥天之下，莫非王土，率土之濱，莫非王臣。」

②『禮記』中庸「溥博淵泉，而時出之。」

譜 廣韻に「博古の切」、補・圃と同音。倭音ホであるべきだが、古来フと読み習わしている。上の普・溥の二字の類である。

右、麋の韻

醜 廣韻に「他禮の切」、體・涕・緹と同音、漢音アイ、呉音タイ。醜酬の醜を、積氏の徒がダイと濁つて読むのは誤りである。

右、齊の韻

賄 廣韻に「呼罪の切」、音悔、倭音クワイ。賄賂を今の人が「ワイロ」というのは非である。悔の字に準じて考えれば、呉音はケでなければならない。今「ワイ」というのは呉音でもない。

愷 豈弟の豈はこれと同じ。さらに凱に作る。廣韻に「苦亥の切」、音開の上声、倭音カイ。清んで読まなければならない。俗儒が濁つて読むのは誤りである。塏・鎧の二字はこれと同音である。

右、賄の韻

軫 廣韻に「章忍の切」、倭音シン。俗儒がチンと読むのは誤りである。疹・贅・紕・緘・診・疹・稹の七字はこれと同音である。

敏 廣韻に「眉殞の切」、愍・閔・啓と同音、倭音ビン。濁つて読まなければならない。俗儒が清んで読むのは非である。

右、軫の韻

吻 廣韻に「武粉の切」、音文の上声、倭音ブン。濁つて読まなければならない。俗儒が清んで読むのは非である。勿・技の二字はこれと同音である。

右、吻の韻

縮 廣韻に「烏板の切」、倭音ワン。漢の盧縮①を、今の人がクワンと読むのは、字体によって誤つたのである。

①『史記』樊鄴滕灌列傳第三十五「其後燕王盧縮反、噲以相國擊盧縮」。

赧 廣韻に「奴版の切」、倭音ダン。濁つて読まなければならない。俗儒が清んで読むのは誤りである。周に赧王①がある。

①『史記』周本紀第四「愼靚王立、六年崩。子赧王延立。王赧時、東西周分治」。

右、漕の韻

輓 軟と同じ。廣韻に「而亮の切」、倭音セン。医書では脉のことを軟の字を用いてあらわし、倭音ナンと読み習わし、仏書にある柔軟の字を釈氏の徒はナンと読み習わすが、いずれも非である。この字は銑の韻に入り、ナンの音はない。今按ずるに、輓の字に糯・煖の二音があり、この字と通じることがある。そのため誤つて輓の字を煖の音に読んだのである。しかし輓の字はもともと弱の意味、怯の意味であり、輓の字は柔の意味であり、字義は同じではない。輓の字も輓の字に通じるので、柔の意味となるが、輓は輓に通じない。

喘 廣韻に「昌亮の切」、音舛、倭音セン。清んで読むべきだが、古来濁つて読み習わしている。今では改めるのはむづかしい。

右、銑の韻

朶 朶と同じ。廣韻に「丁果の切」、倭音タ。清んで読まなければならない。濁つて読むのは非である。唾の字はこれと同音である。薩唾①を、釈氏の徒は清んで読む。

①梵語gativa薩多婆の略音訳。

妥 廣韻に「他果の切」、倭音タ。清んで読まなければならない。

右、哿の韻

仰 廣韻に「魚兩の切」、倭音ギヤウ。濁つて読まなければならない。

右、養の韻

杏 廣韻に「何梗の切」、音行、倭音カウ。常にキヤウと読むのは吳音である。騁 廣韻に「丑郢の切」、逞・程と同音、倭音テイ。俗儒にヘイと読む者がある。騁の字に似ているので誤つたのである。

右、梗の韻

紐 廣韻に「女久の切」、倭音ヂウ。濁つて読むべきであり、今の人が丑の字の音のように清んで読むのは非である。犴・鈕の二字はこれと同音である。杻の字も、木の名の場合にこれと同音である。手械の杻は音丑である。

否 可否の否、倭語で「いな」というものは、有の韻に入る。廣韻に「方久の切」、音缶、倭音フである。臧否の否は、補美の切、音鄙。否塞の否、卦名の否は、

符鄙の切、音圮。いずれも紙の韻に入る。華音には清濁の異同がある。倭音はいずれもヒである。安否を、世俗がヒと読むのは誤りである。

牖 字は有の韻に入る。廣韻に「與久の切」、西・誘・酋・標・莠・羨・栖と同音、倭音イウ。俗儒がヨウと読むのは誤りである。字体は片に従い、戸に従い、甫に従う。右傍が庸の字に似ているので、音を誤つたのである。

畷 廣韻に「莫厚の切」、牡・某・拇と同音、倭音ボウ、またはボ。濁つて読むべきであるが、古来ホと清んで読み習わしている。今では改めるのはむづかしい。斗 南斗・北斗は星の名である。廣韻に「當口の切」。倭音はトウであるべきだが、

古来トと読む。南斗の斗を主の音で読むのは俗儒の誤りであり、理由がない事である。斗の名が混乱するので、南北の字を加えたのである。主の音の場合には水を斟む器の名である。周禮の春官鬯人に見える①。廣韻には料に作る②。料は禮記の喪大記に見える③。

①『周禮』春官・鬯人「大喪之大湊、設斗、共其鬯」。鄭注「斗、所以

沃戸也、「經典釋文」「音主、注同」。

②『廣韻』上聲慶第九「料、澗水器也」。

③『禮記』喪大記「御者二人浴、浴水用盆、沃水用料、浴用絺巾、拒用浴衣、如它日」。

枸 廣韻に「古厚の切」、苟・狗・垢・筍・肴と同音、倭音コウ。枸杞を常にクコと
いうのは、二字いずれも呉音である。さらに矩の音があり、慶の韻に入る。枳枸
は木の名であり、毛詩に見える①。この国で「けんほのなし」というものであ
る。

①『詩經』小雅・南山有臺「南山有枸、北山有楸」、毛傳「枸、枳枸」。
右、有の韻

去声

甕 瓮と同じ。送の韻に入る。廣韻に「烏貢の切」、倭音ソウ。俗儒がヨウと読むの
は非である。送の韻にヨウの音はない。甕の字もこれと同音である。

右、送の韻

筭 あるいは筭に作る。廣韻に「徐醉の切」、遂・穗と同音、倭音スイ。彗星を古来
ケイと読むのは誤りである。廣韻に「又音歳」、倭音セイ。又「内芮の切」、倭
音デイ。

率 この字は去声に二音あり、いずれも眞の韻に入る。一つは將帥すいの帥と通用する。
倭音スイ。一つは音類、倭音ルイ。字彙に「總率なり」①と註して、俗語の「お
ほむね」という意味である。この時は類の字を用いることがある。俗儒にはこ
のことを知らないものが多い。

①『字彙』午集「又力遂切、音類、計數之名。又等也、總率也」。

帥 この字はもともと入声であり、質の韻に入る。倭音シュツ。論語に「子帥ひまゆる
に正を以てせば」①とあるのがそれである。さらに去声では眞の韻に入る。廣
韻に「所類の切」、倭音スイ。將帥である。我が朝の官に太宰たさいの帥そうがある。將

帥の帥であるのに、古来ソツと読むのは誤りである。

①『論語』顔淵「季康子問政於孔子。孔子對曰、政者、正也。子帥以正、孰
敢正」。

右、眞の韻

恕 廣韻に「商署の切」、音庶、倭音シヨ。清んで読むべきだが、古来濁つて読み習
わすのは誤りである。しかし今では改めるのはむづかしい。

絮 綿と訓じる時は（廣韻に）「息據の切」、倭音シヨ。清んで読むべきだが、古来
濁つて読み習わしている。さらに絮ちやうの絮は、「抽據の切」、倭音チヨ。曲禮に
見える①。さらに「尼據の切」、音女、倭音ヂヨ。姓である。漢に絮舜がある
②。

①『禮記』曲禮上「母嚶羹、母絮羹、母刺齒、母歎醢」。

②『漢書』趙尹韓張兩王傳第四十六「敞使賊捕掾絮舜有所案驗」、注「李奇
曰、絮音絮。師古曰、絮、姓也、音女居反、又音人餘反」。

右、御の韻

戍 辺を守ることを戍という。廣韻に「傷遇の切」、倭音シユ。清んで読まなければ
ならない。濁つて読むのは誤りである。

右、遇の韻

細 字は霽の韻に入る。廣韻に「蘇計の切」、音増。倭音ではセイであるべきだが、
古来サイと読み習わしている。濟・歳などの字を例とすると、これは呉音であ
るにちがいない。今では改正するのはむづかしい。増を今ではセイと読む。俗
儒がサイと読むのは、音註に音細とある①のを見て、細の字の漢音がセイであ
ることを知らずに呉音に従ったのである。字体によってシヨの音に読むのはさ
らに非である。

①『說文解字』「増、夫也。从土晉聲。詩曰、女也不爽、士貳其行、士者夫
也、讀與細同」。

祭 この字ももともと霽の韻に入る。祭祀の祭である。廣韻に「子例の切」、倭音セ

イ。さらに卦の韻に入る。国の名であり、春秋に祭伯がある①。さらに姓であり、後漢に祭遵がある②。いずれも「側界の切」、倭音サイである。しかし祭祀の祭も古来サイと読み習わし、セイの音があることを人々は知らない。サイも呉音であるにちがいない。際の際の字も、祭祀の祭と同音であるが、古来サイと読む。今ではいずれも改めるのはむづかしい。

①『春秋』隱公元年「冬、十有二月、祭伯來」。

②『後漢書』鮑期王霸祭遵列傳第十「祭遵、字弟孫、潁川潁陽人也」。

滯 廣韻に「直例の切」、音礙、倭音テイ。常にタイと読むのも呉音である。

右、霽の韻

盼 顧盼、轉盼、盼睐、美目盼兮の盼はもともと盼に作る。字は諫の韻に入る。廣韻に「匹覓の切」、倭音ハン。俗儒がメンと読むのは、誤って眇の字と混同したのである。眇は廣韻に「莫甸の切、音麴。斜視」と註する。横目で視ることである。さらに説文に「目、偏合ふなり」①とある。片眼を閉じて、片眼で視ることである。盼の字と音義はいずれも異なる。盼を俗に誤って眇に作るが、眇はもともと別字である。廣韻に「五計の切」、又「下戾の切」とあり、華音ではふたつの切は別である。倭音はいずれもゲイ、「恨視」②と註する。孟子の「眇眇然」③がそれである。毛詩の「美目盼兮」④の眇を、今の人はハンと読み、顧盼の眇をメンと読む。盼・眇・眇の三字を混同して字を誤まり、音をも誤まる。学者は辨別認識しなければならない。眇の字は、字彙には「莫典の切、音勉」⑤とあり、上声である。

①『説文解字』「眇、目偏合也、从目丐聲」。

②『説文解字』「眇、恨視也、从目分聲」。

③『孟子』滕文公上「爲民父母、使民盼然、將終歲勤動、不得以養其父母、

又稱貸而益之、使老稚轉乎溝壑、惡在其爲民父母也」。

④『詩經』衛風・碩人「螭首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」。

⑤『字彙』午集「眇、莫典切、音勉」。

右、諫の韻

乍 字は禡の韻に入る。廣韻に「鋤駕の切」、倭音ザ。濁って読むべきだが、今は清んで読んでも害はない。医書に「乍寒乍熱」①という語があるが、学者がサクと読むのは誤りである。

①『傷寒論』氣血虛實「瘀在腠理、則乍寒乍熱。瘀在肌内、則潮熱盜汗」。

右、禡の韻

向 もともと「許亮の切」、香の去声、漢音キヤウ、呉音カウ。向背の向である。さらに「式亮の切」、音餉、倭音シヤウ。地名であり、姓である。左傳にある晋の羊舌肸の字が叔向①、漢の劉子政の名が向②であるのは、いずれも向背の向である。俗儒がシヤウと読むのは誤りである。

①『左傳』襄公十六年「十六年、春、葬晉悼公。平公即位。羊舌肸爲傳、

杜注「肸、叔向也」。

②『漢書』楚元王傳第六「向、字子政、本名更生」。

右、漾の韻

畜 牛・馬・羊・犬・豕・雞を六畜という。字はもともと曹に作り、宥の韻に入る。廣韻に「許宥の切」、倭音キウ。六畜を、世俗がチクと読むのは非である。星宿の宿は去声。廣韻に「息救の切」、秀・繡と同音、倭音シウ。本音の入声で読んでもよい。古来二音あり、入声に読むのを誤りであるとはいえない。幼 字は宥の韻に入る。廣韻に「伊謬の切」。倭音イウであるべきであり、古来エウと読み習わすのは誤りである。しかし今では改めるのはむづかしい。

右、宥の韻

入声

族 廣韻に「昨木の切」、倭音ソク。濁音である。俗儒がシヨクと読むのは非である。倭音では屋の韻にシヨクの音はない。

畜 廣韻に「許竹の切」、倭音キク。養と訓じる。さらに「丑六の切」、倭音チク。

畜止・儲畜の畜である。周易の大畜・小畜①がそれである。蓄にも作る。畜産・畜生は、養の意味であるので、釈氏の徒がチクと読むのは誤りである。

①『周易』「大畜」利貞、不豕食、吉、利涉大川。

『周易』「小畜」亨、密雲不雨、自我西郊。

右、屋の韻

沃 廣韻に「烏酷の切」、倭音ラク。曲沃は地名①である。俗儒がヨクと読むのは非である。字彙に「音屋」②とある。盞の字はこれと同音である。

①『春秋左氏傳』隱公五年「曲沃莊伯以鄭人、邢人伐翼、王使尹氏、武氏助之。翼侯奔隨」。

②『字彙』巳集「沃、烏谷切、音屋、灌溉也」。

右、沃の韻

帥 廣韻に「所律の切」、倭音シュツ。俗儒がソツと読むのは非である。字は質の韻に入り、ソツの音はない。太宰の帥を、古来ソツと呼ぶのは誤りである。すでに前に見える。率・蟀の二字はこれと同音である。

卒 廣韻に「子聿の切」、倭音シュツ。終と訓じる。大夫が死ぬことを卒という①が、俗儒がソツと読むのは誤りである。字は質の韻に入り、ソツの音はない。士卒の卒、倉卒の卒は、いずれも月の韻に入る。士卒は「臧没の切」、清音である。倉卒は「倉没の切」、次清音である。華音ではふたつの音は別である。倭音では区別はなく、いずれもソツである。

①『禮記』曲禮下「天子死曰崩、諸侯曰薨、大夫曰卒、士曰不祿、庶人曰死」。

右、質の韻

祓 廣韻に「敷勿の切」、音拂、倭音フツ。災を除く祭である。倭語では「はらひ」という。俗儒がバツと読むのは誤りである。字は示に従い、禾に従うのは非である。祓は別字である。字彙に「蒲發の切、音鉢、禾傷るるなり」①とある。祓は弗に作ることもある。毛詩に「以て子無きを弗ふ」②とある。

①『字彙』午集「穢、蒲撥切、音鉢、禾傷也」。

②『詩經』大雅・生民之什・生民「生民如何、克禋克祀、以弗無子」。

右、勿の韻

虐 字は藥の韻に入る。廣韻に「魚約の切」、倭音ギヤク。俗儒がゲキと読むのは非である。藥の韻にゲキの音はない。瘡の字はこれと同音である。

諛 廣韻に「虛約の切」、倭音ギヤク。清んで読まなければならない。俗儒が濁って読むのは、誤って虐の字の音と混同したのである。虐は牙音、諛は喉音であり、華音はまったく異なる。

魄 落魄の魄は藥の韻に入る。廣韻に「他各の切」、託・稟・柝と同音、倭音タク。俗儒がハクと読むのは誤りである。魂魄の魄と、音義いずれも異なる。毛に従って、魄に作ることもある。魂魄の魄は陌の韻に入る。

右、菓の韻

適 字はもと陌の韻に入る。廣韻に「施隻の切」、音釋、漢音セキ、吳音シヤク。倭語に「ゆく」「かなふ」「まさに」「たまたま」というのは、いずれもこの音である。「適來」「閑適」「適悅」、俗語の「適纒」、いずれもこれである。さらに錫の韻に入る。「都歴の切」、音的、漢音テキ、吳音チヤク。論語の「無適」「無莫」①、左傳の「吾誰適從」②、毛詩の「誰適爲谷」③は、いずれもこの音である。さらに嫡の字と通用する。これ以外はいずれも釈の音である。俗儒がこのことを知らずに、一概的にの音に読むのは誤りである。程伊川が敬の字を解釈するにあたって、「主一無適」④という語がある。俗儒はテキと読む。唐の詩人に高適、李適之があり、唐詩を読む者がテキと読むのは、いずれも誤りである。これらの適の字はいずれもセキと読まなければならない。

①『論語』里仁「子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比」。

②『左傳』僖公五年「退而賦曰、狐裘尫茸、一國三公、吾誰適從」。

③『詩經』衛風・伯兮「自伯之東、首如飛蓬、豈無膏沐、誰適爲谷」。

④『論語』學而「道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時、《集注》」

「敬者、主一無適之謂」、「二程全書」「程子曰、主一、之謂敬、無適、之謂一」。

右、陌の韻

楫字は葉の韻に入る。廣韻に「即葉の切」、接・睫と同音、倭音セフ。俗儒がシフと読むのは非である。葉の韻にシフの音はない。字は楫にも作る。

摺 摺豐の摺は葉の韻に入る。廣韻に「之涉の切」、聾・備・摺と同音、倭音セフ。俗儒がシフと読むのは非である。

右、葉の韻

乏字は洽の韻に入る。廣韻に「房法の切」、倭音バフ。世俗がボクと読むのは非である。つねに貧乏びんぱふというの正しい。

右、洽の韻

以上、古来、倭音が誤っていてかならず正さなければならない、おおよそこの類である。これ以外はかならずしも改正する必要はなく、古来の慣習どおり読んでよい。世の俗儒には字音に明らかでなく、訛謬を継承していて、そのあやまつていることをわかっていないものが多い。自分が誤るだけでなく、往々にして人を誤らせる。これはまことにおそろしいことである。さらに倭読の法に、その字の正音ではないが他の字とまぎらわしい場合があれば、音を区別して読むのをならわしとすることがある。初学はこのことを知っておかなければならない。今数字を左に列挙する。

空 廣韻に「苦紅の切」、漢音コウ、呉音クウ。六官の司空を漢音で読めば、司寇しこうの倭音とまぎらわしいので、この字を呉音に読む。

嘗 廣韻に「市羊の切」、音常、倭音シヤウ。もともと濁るべき音であるが、つねに清んで読む。ただ四時の祭を「禘嘗やくていじやうしやう」というが、嘗を清んで読めば、

烝の字と倭音がまぎらわしいので、かならず濁って読む。

驚 廣韻に「舉卿の切」、京・荊と同音、漢音ケイ、呉音キヤウ。医書を読む場合、

「驚風」「驚悸」の類の驚の字は、すべて呉音を用い、漢音を用いない。ただし七情の「喜怒哀思悲驚恐」の驚の字は、かならず漢音で読まなければならない。驚の呉音が恐の漢音とまぎらわしいからである。

①中医では「喜怒哀思悲驚恐」を七情という。

情 廣韻に「疾盈の切」、音晴、漢音セイ、呉音シヤウ。儒書では漢音を用いるべきであるが、性情の二字が同時にあらわれる場合が多く、漢音で読めば性と情がまぎらわしいので、この字を呉音に読む。

鹹 廣韻に「胡讒の切」、咸・函と同音、倭音カン。つねに清んで読み習わすが、医書の五味①を列挙するところを清んで読めば、甘とまぎらわしいので、この字をかならず濁って読む。

①「禮記」禮運「五味六和、十二食、還相爲質也」、鄭注「五味、酸・苦・辛・鹹・甘也」。

衛 廣韻に「于歳の切」、漢音エイ、呉音エ。医書では呉漢の二音を兼用するが、この字は漢音に読むことが多い。ただ榮衛①の衛はかならず呉音に読む。榮の字と倭音がまぎらわしいからである。

①「榮」は血液、「衛」は生氣。『素問』湯液醪醴論「榮衛不可復收」。

良 卦の名である。廣韻に「古恨の切」、倭音コン。もともと清んで読むべきだが、八卦の中では坤の字と倭音がまぎらわしいのでこの字を濁って読むが、正音ではない。

中華では古文異体の字、あるいは法帖などの草書の朦朧として読みにくい場合に、楷書を各字の傍に附註したものを「釋文」という。さらに仏書の梵文ぼんもんに、漢字をもちいてその音を附註したものを「対訳」という。あるいは「対註」という。わが国で読みにくい漢字の傍に国字かこでその音を附書するのは梵文の対訳の類である。この事は軽視してはならない。とりあえず平声の韻を例として言うと、支微魚虞齊佳灰眞文元寒刪先歌麻侵覃鹽咸の十九韻は明白であつてまぎらわしいことはない。東冬

江蕭肴豪陽庚青蒸尤の十一韻は倭音にはいずれもウの響きがあり、声に出して読む場合、混同して区別はないので、軽率で粗雑な字者は往々にして国字かの対訳を誤る。

この事は大義には関係しないが、わが国の学士家のしきたりであり、自然の條理であり、乱してはならないものがある。どうしておるそかにすることができようか。そこでその要領を録して童蒙に示す。

東の韻 東の字、倭音はトウである。だからこの韻に属する字はかならずヲコソトノホモロの下にウの声を附ける。たとえば翁ウ公コ葱ソ通ト豊フ蒙ム籠ロなどがそれである。さらにイキシチリの下にウの声を附ける字がある。熊弓終中隆などがそれである。これ以外は類推してわかる。

冬鍾の韻 冬の字、倭音はトウである。東の字と同じなので、この韻に属する字は

東の韻と異なるところはない。たとえば攻宗コウソウ炆農ウノウ隆などがそれである。別に

鍾の韻に属する字がある。鍾の字、倭音はシヨウである。だからこの韻に属する字は、必ずヨ、キヨ、シヨ、チヨ、リヨの下にウの声を附ける。たとえば容ヨウ恭キョウ衝ショウ重チョウ龍リョウなどがそれである。これ以外は類推してわかる。

江の韻 江の字、倭音はカウである。だからこの韻に属する字はかならずアカサタナハマラの下にウの声を附ける。たとえば朕腔アウカウ臆サウ椿カウ臙タウ邦ウ扈カウ瀧サウなどがそれである。

蕭宵の韻 蕭宵の二字、倭音はシヤウである。だからこの韻に属する字はかならずヤ、キヤ、シヤ、チヤ、ニヤ、ヒヤ、ミヤ、リヤの下にウの声を附ける。たとえば妖驕ヤウキョウ燒シヤウ朝饒チョウニョウ標ヒヤウ猫ミヤウ聊リヤウなどがそれである。

肴の韻 肴の字、倭音はカウである。だからこの韻に属する字の対訳は、江の韻と同じ。たとえば岬交アウカウ稍サウ啁カウ饒タウ包ウ茅カウ顛サウの類である。ただしこの韻の字には、蕭の韻と音が通じるものがある。多くは呉音である。その対訳は蕭の韻と同じ。

豪の韻 肴の韻と同じ。たとえば麀高アウカウ騷サウ刀カウ獠タウ褒ウ毛カウ勞サウなどがそれである。ただしこの韻には蕭の韻と通じる音はない。

陽唐の韻 陽の字、倭音はヤウである。だからこの韻に属する字の対訳は蕭の韻と

同じ。たとえば羊ヤウ董キョウ商シヤウ張チヤウ嬢ニヤウ良リヤウの類である。唐の字、倭音はタウである。だからこの韻に属する字の対訳は江の韻と同じ。たとえば鶯剛アウカウ桑サウ當カウ囊ウ滂カウ茫サウ茫ウ郎カウ王ウの類である。参考にしなさい。さらに光の字などはクワの下にウの声を附ける。

庚耕清の韻 庚耕の二字、倭音はカウである。だからこの韻に属する字の対訳は江の韻と同じ。たとえば罌アウカウ阨カウ爭サウ臆ウ儻カウ彭サウ盲ウ橫ウの類である。さらに舩フネの字などは、クワの下にウの声を附ける。このクワウという音は、陽庚の二韻に限ってだけ

ある。清の字、漢音は明白である。呉音はシヤウなので、この韻に属する字の呉音は陽の韻に類似する。だから対訳も陽の韻と同じ。たとえば嬰ヤウ京キョウ精セイ評ヘイ明メイなどがそれである。

青の韻 漢音は明白である。呉音はシヤウなので、この韻に属する字の呉音は庚の韻の字の呉音と同じである。対訳も庚の韻の字の呉音と同じ。たとえば經キョウ星セイ丁テイ寧ネイ冪メイ冥メイ靈レイなどがそれである。

蒸登の韻 蒸の字、倭音はシヨウ、登の字、倭音はトウである。この韻の対訳は冬の韻と同じ。たとえば膺ヨウ兢キョウ升ショウ徵チョウ氷ヒョウ陵レイの類は蒸の韻に属する。絰キョウ僧ソウ騰テイ能ネイ崩ボウの類は登の韻に属する。

尤幽の韻 尤幽の二字、倭音はイウ、侯の字、倭音はコウである。この韻の対訳は東の韻と同じ。たとえば優イウ鳩キウ脩シウ抽チウ柔リウ彪ヒウ繆ミウ劉リウの類は尤幽の二韻に属する。謳ウ鈎コウ洩シウ兜トウ繻ニウ衰スイ嘔ウ樓ロウの類は侯の韻に属する。

以上、平声の韻を明らかにした。上去の二声はこれらから類推することができる。入声は下にツクチキの音があるので明白である。ただ緝キツ合カフ呈テイ葉エフ帖テフ洽カフ狎ハフ業エフ之シの九韻は、下にフの音があり、その字を読む場合、平上去の三声の字に類似する場合があるの

で、ややもすれば対訳を誤まる。緝の韻に属する字は、イキシチニヒミリの下にフの声を附ける。たとえば邑急イフ執キツ繫シツ入ニツ鵠キツ立リツなどがそれである。合ガフ盍カフ洽カフ狎ハフ業エフ之シの五韻に属する字は、いずれもアカサタナハマラの下にフの声を附ける。たとえば始閭アフ巾カフ答サフ納ナフ法ハフ臘ラフなどがそれである。葉帖業エフ之シの三韻に属する字は、皆エケセテネヘメレの下にフの声を附ける。たとえば擘エフ頰ケフ響セフ輒セフ聶ネフ獵レフなどがそれである。他はまぎらわしくない

ので、いちいち韻毎には明らかにしない。さらに舌音のチツと齒音のシスは、清音は明白であるが、濁音は混同しやすい。忸怩の二字などはいずれも舌音なので、チの濁音である。尋常の二字はいずれも齒音なので、シの濁音である。除の字は舌音チヨである。徐の字は齒音ジヨである。図の字は舌音なので、呉音はヅである。隨の字は齒音ズイである。これ以外は類推することができる。さらに齒舌音日母に属する字は、齒音に従ってシスの濁音である。日の字、漢音はジツである。女の字などは、もともと男女の女であり、舌音なので、漢音はヂヨである。爾女の女は汝と同じで、日母に属し、漢音はジヨである。これ以外は類推して知ることができる。

初学の士は上の諸例に随って、それぞれ韻母字母をみてその音を考えれば、対訳に大きな誤りはないであろう。慎しんでおろそかにしてはならない。

○仏家に陀羅尼がある。いずれも梵語である。もともと梵字で書かれていたが、中華の人は梵字を読むことができなかったたので、仏書を翻訳する者が梵音に合致する漢字をその傍に附書して、漢字の音で梵字を読ませたのであり、これを「対訳」という。あるいは「対註」という。対訳しおわれば、その後は梵字は存在しないが、対訳した漢字を利用して梵音を伝えて、陀羅尼を誦読した。梵語を伝える場合だけがこのようであるのではない。四方万国が語を伝える場合すべて同様である。鶴林玉露に日本の語を記載して、筆を「分直」といい、硯を「松蘇利」という①のような類はいずれもこの例である。だから陀羅尼を読むには、対訳の字をかならず華音で読まなければならない。華音にも南北の方言の異同があるので、もし精確に読もうとするならば、訳者の郷里を調べて、その故郷の音に従わなければならない。そうあつてはじめて梵音を失わずにすむのではないだろうか。さもなければ梵音から遠く離れてしまう。今この国では釈氏の徒が陀羅尼を誦読する場合は倭音で読む。「囊莫」をナウマクと読み、「摩訶」をマカと読み、「般若波羅密多」をハンニヤハラミツタと読むのはいずれも倭音であり、これがどうして梵音であるのか。「分直」「松蘇利」を倭音で読んで、倭語の「ふんで」「すずり」に合わないことから類推してわかる。陀羅尼は天竺の歌詩であり、諷詠すべきものなので、その働きは声

音にあり、声音の道は微妙である。仏徳を讀歎し、鬼神を感動させ、災を禳い福を祈り、心を澄し徳を養うのはすべて声音の力であるので、彼の家ではこれを「聲明」という。左傳の語を取って名づけたのである。しかし梵語の本音を失ってしまったのは、陀羅尼の功力も少ないにちがいない。ましてや今の僧が陀羅尼を誦読するのは諷詠の意識はなく、ただ水中の蛙が鳴くようなものであり、耳にやかましいだけなので、梵音からますます遠ざかってしまいうにちがいない。中華の僧が経を読み陀羅尼を誦読するには、諷詠の意識があり、声音が響きわたるので、聴く者が感慨を起さないことはないのである。

①『鶴林玉露』卷十六「予少年時、於鐘陵邂逅日本國一僧、名安覺、自言離其國已十年、欲盡記一部藏經乃歸。念誦甚苦、不舍晝夜、每有遺忘、則叩頭佛前、祈佛陰相、是時已記藏經一半矣。夷狄之人、異教之徒、其立志堅苦不退轉至於如此。朱文公雲、今世學者、讀書尋行數墨、備禮應數、六經語孟、不曾全記得三五板、如此而望有成、亦已難矣。其視此僧、殆有愧色。僧言其國稱其國王曰天人國王、安撫曰牧隊、通判曰在國司、秀才曰殿羅罷、僧曰黃榜、硯曰松蘇利必、筆曰分直、墨曰蘇彌、頭曰加是羅、手曰提、眼曰媚、口曰窟底、耳曰弭弭、面曰皮部、心曰母兒、腳曰又兒、雨曰下米、風曰客安之、鹽曰洗和、酒曰沙嬉。」

②『春秋左氏傳』桓公二年「夫德、儉而有度、登降有數、文物以紀之、聲明以發之、以臨照百官。百官於是乎戒懼而不敢易紀律。」

○倭讀の法に、本濁、新濁、連声というものがある。これは仏家の名称であり、儒家にもこの事がないわけではない。「本濁」とは、もともと濁った音をいう。「新濁」とは、もともと清んで読むべき字であるが、二字三字連属したものを、音便にしたがって下の字を濁って読むことをいう。南山・東方などは、「山」「方」いずれも濁って読む。これが新濁である。「連声」とは、喉音の影喩の二母に属する字を連属の音便でナニヌネノ、あるいはタチツテトの音に読むことをいう。天王の王をナウと読み、越王の王をタウと読み、南音をニンと読み、八音をチンと読むなどがそれ

である。さらに遠方・葛伯というのは、方・伯の二字は唇を合わせて読む。華音の幫・滂の二母を読むのと同じである。この国ではこれを「半濁」という。国字の肩に、一小圈を加えて號とする。これも連声である。釈氏の書では、四声を点発する場合に、倭音で濁って読む字には二小圈を点じる。本濁は横にならべ、新濁はたてにかさねる。儒家ではこれを使用しない。そもそもこれらの方法は、いずれもわが国の古くからのならわしであるので、学者はこのことをあわせて知っておかなければならない。中華には新濁や連声などの事はない。清濁も倭音とまったく異なる。

倭讀要領卷上

『倭讀要領』原文（平假名校訂）

凡例

- 一、本校訂は『倭讀要領』享保十三年刊を底本とし、原文の片仮名を今の人が読みやすいように平仮名に直した。
- 一、原文は読点のみであるが、文意にしたがって句読点に直す。
- 一、標題、引用文などは返り点、送り仮名を附しているが、パソコン表記上の制約により省略した。書き下しは現代語訳の部を参照されたい。
- 一、語の左右にルビがあるものがあるが、左訓は語の下に「」を附して入れる。

倭讀要領

倭讀要領叙

余幼奉先君子之訓曰、不讀書無以爲士、因稍稍取孝經論語諸書、口授句讀。已而出就外傳、誦習古文、遂好讀書。初爲性理家之言、後稍疑之、求古學之方、博訪旁諮、未之有得也。嘗從一師學華語。退而省舊所誦詩書古文者、坐侏離之習、失其義者十

八九。始知黃備氏之教、欲道人於易、反貽之害也。弱冠懷游學之志、負笈於千里、聞有嗜學好古者、必就謀焉、大率所見不若所聞、竟未厭吾意。純也八年於外、無所得於學。來歸最後、獨得徂來先生、以爲之歸。及聞其論說也、乃純鄉所求者畢有。且先生能華語、尤惡侏離之讀、亦與純素心合。蓋益知倭讀之難、而爲害之大耳。自是之後、致思於古學有年數矣。雖至愚之性、而千慮之一、如有所得、時與從游者言。人或勸撰次其語以訓蒙士。於是手錄成編、命曰倭讀要領。夫倭語不可以讀中夏之書、審矣。余今層層焉爲此者、豈謂規矩大方乎哉。唯是窮鄉寒士欲讀書而未知其方者、觀而有取焉、其亦庶乎有補。余既以蚤奉先君子之訓、遂好讀書。夫世豈不有與余同好者哉。則期此書之不見棄、不亦可乎。

享保十三年戊申二月初吉

東都後學信陽太宰純自叙

序終

倭讀要領叙

余幼くして先君子の訓じて「書を讀まざれば以て士と爲る無し」と曰ふを奉じて、因りて稍稍孝經論語の諸書を取りて、句讀を口授す。已にして出でて外傳に就き、古文を誦習し、遂に書を讀むを好む。初め性理家の言を爲め、後に稍く之を疑ひ、古學の方を求め、博く訪ね旁に諮るも、未だ得ること有らざるなり。嘗て一師に従ひて華語を學ぶ。退きて舊誦する所の詩書古文なる者を省るに、侏離の習に坐して、其の義を失ふ者十に八九。始めて黃備氏の教へは、人を易きに道びかんと欲して、反て之に害を貽すを知る。弱冠にして游學の志を懷き、笈を千里に負ひ、嗜學好古なる者有るを聞けば、必ず就きて焉に謀るに、大率見る所は聞く所に若かず、竟に未だ吾が意に厭くかず。純や外に八年なるも、學に得る所無し。來歸すること最も後。獨り徂來先生を得て、以て之が歸と爲す。其の論說を聞くに及んで、乃ち純の郷に求むる所の者畢く有り。

且つ先生は華語を能くし、尤も侏離の讀を惡む。亦純の素心と合す。蓋し益ます倭讀の難くして、害を爲すの大なるを知るのみ。是より後、思ひを古學に致すこと年數有り。至愚の性と雖も、千慮の一、如し得る所有れば、時に從游する者と言ふ。或いは其の語を撰次して以て蒙士を訓ぜんことを勸む。是に於て手録して編を成し、命じて倭讀要領と曰ふ。夫れ倭語は以て中夏の書を讀む可からざることを審かなり。余今此を爲すに屑屑なる者なり。豈に大方を規矩すと謂はんや。唯だ是れ窮郷寒士、書を讀まんと欲すれども未だ其の方を知らざる者、覩て焉を取る有り、其れ亦補有るに庶からんや。余既に蚤に先君子の訓を奉じて、遂に書を讀むを好む以て、夫れ世に豈に余と好みを同じくする者有らざらんや。則ち此の書の棄てられざるを期するも、亦可ならずや。

享保十三年戊申二月初吉

東都後學信陽太宰純自叙

序終

倭讀要領目錄

上卷

倭讀總說第一

日本無文字說第二

中國文字始行于此方說第三

倭音說第四

倭語說第五

顛倒讀書文義說第六

倭音正誤第七對譯本濁新濁連聲法附

中卷

倭語正誤第八

倭讀正誤第九

讀書法第十

下卷

點書法第十一

抄書法第十二

發音法第十三

倭讀例第十四

學則第十五

學戒第十六

目錄終

倭讀要領卷上

信陽太宰純徳夫撰

倭讀總說

倭讀とは、倭語にて書を讀むなり。倭語の讀は、何れの世より始めるといふことを知らねども、菅江二家の讀法〔よみやご〕、昔より傳はれり。古は皇朝の人、貴賤と無く皆學術ありしに、王政衰てより、文學の道、禪僧に傳はりて、三四百年を歴たり。は一變なり。近世慶長年中より、藤惺窩林羅山二先生出て、儒學を士大夫の間に倡ふ。元和太平の後、儒教漸海内に行はれて、農工商賈も、孝悌忠信の道を聞に預る。是誠に國家明德の化にして、二先生の功、多からずといはず。但二先生宋儒を尊信し、新註の四書五經を用て、程朱の教を弘めしによりて、古學遂に廢れて、宋儒の説、世に盛に行はるること、今已に二百年なり。是又一變なり。然るに薩摩の僧文之四書を讀み、羅山先生四書五經を讀てより、後來これに倣ふ者數十家、各其本ありて世に行はる。今其本を觀れば、諸家互に得失あり。大抵其人句讀を知らず、文法を解せず、字義を曉らず、只倭語の意にて讀る故に、文義を誤ること甚多し。其中に山崎氏の本較勝れり。闇齋先生心を朱氏の書に潜めしによりて、

新註の旨を得たること頗多し。然れども其人亦文章の道に味くして、只門戸を立んとのみしける故に、省くまじきテニヲハを省き、華語にも倭語にも違て、鄙俚なる讀をなせり。凡中華の書を讀むは、中華の音を以て、上より順下に讀て、其義を得るを善とすれども、吾國の人に於て、華音の讀を習ふこと容易ならねば、已こを得ずして、倭語の讀をなすなり。然れば文義をだに失はずは、其讀法は人人の心に任すべし。何ぞ必しも門戸を立て、一家の法を定んや。只要領を得て、其規矩に循はば、類に觸て自然に活法を悟るべし。門戸を立てるとは、流義を立てるなり。要領とは、要は腰と同じ、衣のこしなり。領は衣のゑりなり。衣を擧るに、腰と領とを取れば、全體皆擧る意なり。されば學問の道も、要領を求ることを務むべし。既に要領を得て、日夜尋思すれば、靈慧自發して、卒に大體を得るなり。

日本無文字説

日本には文字なし。今の國字「かな」の以呂波は、弘法大師造れりといひ傳ふ。是を國字と稱すれども、吾國の字にはあらず。中華の草字を取て、其形を壞りて、別一體を成せる者なり。吾國に本來文字なきことは、先賢の説明白なり。齋部の廣成が古語拾遺の序に、蓋聞、上古之世、未有文字、貴賤老少、口口相傳。前言往行、存而不忘と云り。又大江の匡房の管崎の宮の記に、我が朝始書文字、代結繩之政、即創此朝と云り。此朝とは、應神天皇の時を指るなり。又三善の清行が昌泰四年の勅文に、上古之事、皆出口傳。故代代之事變、應遺漏と書り。此等皆證とすべし。近ごろ筑前の貝原損軒先生も、此諸説に據て、吾國に文字なきことを確論せり。損軒は吾國の記載に博覽なりし人なれば、其説尤信すべし。巫祝の徒、往往吾國に文字ありしことをいふは、皆孟浪の談なり。今彼等が家に、上古の國字とて傳ふるは、陰陽家の符書「ふだまもり」の字の如くなる者にて、甚き杜撰なり。學者只先賢の定論を信すべし。妖妄の説に惑ふべからず。

中國文字始行于此方説

應神天皇即位したまひて十六年に、百濟國より王仁といふ博士を召て、太子に書を授け奉らしめらる。王仁來て、論語千字文を獻ず。是より中華の文字、吾國に行はる。然れども此時王仁何れの國の音を傳へ、如何なる讀法「よみやう」を教たりしといふことを聞かず。王仁博士なれば、中華の音に通じ、中華の讀法を解したりけんも知らねども、此方に傳はれる字音、中華の音にあらざるを以て考れば、只百濟の音、百濟の讀法を教たりと見ゆ。百濟の讀も、如何なる法といふことを知らねども、おもふに今の朝鮮の讀法の如くならん。朝鮮には吾國の如く顛倒の讀あり、字に助聲ありて、此方のテニヲハの如し。諺文とて此方の以呂波の如くなる者ありて、是を字の側に細書して、中華の語を以て、朝鮮の語となして讀む。字音の異なるのみにて、吾國の讀法と異なること無し。夷狄の言語、萬國皆かくの如し。王仁が時、百濟にも諺文ありて、是を吾國に傳へなば、今の世にも遺るべきことなるに、一字も傳はらざるを以て觀れば、王仁其時諺文を用ひず。只本書のままにて授けしならん。或人以呂波の中のへつの二字は百濟の諺文なるべしといへり。さもあらんか。片假名といふ者は、吉備公造れりといひ傳ふ。中華の眞字の偏傍上下の二三畫を割取て倭語を細書するに便ならしめたる者なり。後に以呂波作りて、遂に國俗通行の文字となれり。此二種は吾國にて造たる字なる故に、同くこれを國字「かな」といふ。實は皆中華の字より出たる者なり。

倭音説

倭音とは、日本に傳はれる字音なり。倭音に二種あり。一つには漢音、二つには吳音なり。此二種の音を、異國の音なりとて、古より習傳ふれども、今より觀れば、皆中華の音にあらざり。其初何れの國の音を受傳けるといふことを知らず。舊説に昔對馬の國に、異國より來て住る尼あり。其名を法明といふ。對馬の人は是を師として、字音を學びしが、遂に海内に弘まりて、儒佛の書を皆此音に讀む。彼の尼吳國の人なりし故に、其傳へし音を吳音といふ。對馬の國より始まりし故に、又對馬音といふ。其後何人か漢音といふ者を學て、吳は邊土にて、其音正からず。漢音は

中原（なかつくに）の正音なりと稱せしによりて、桓武天皇の延暦十一年に、明經の徒（ともしがひ）に詔（みことのり）して、漢音を習はしめ、十七年より、始て五經を漢音に讀ましめらる。是より定て、儒書には漢音を用ひ、佛書には吳音を用ふることになりぬといふ。今按ずるに、吳音を邊土の音なりといふは、周より以前の吳國を指ていへるなり。後世は爾（しか）いふべからず。其故は、吳は本南方荆蠻の國にて、周の代春秋の初までは、其君中原の諸侯の會同に預ることも無く、其民斷髮文身の俗なれば、其語音も正かるべからず。然れども其國本大國にて、春秋の世、王壽夢が時より、中原と交通して、王闔廬に至て、遂に霸業を成せり。闔廬は壽夢が孫なり。闔廬が子夫差が時、國亡て、其地越（えつ）に并せられ、戰國の時に及て、越又楚に并せらる。秦漢以後は、其地を吳郡と名づけて、南方の一都會なり。三國の時孫氏これに據る。山海の利を兼て、四方の輻湊（ふつそう）「あつまる」する所なる故に、六朝以來、吳郡の繁華、天下無雙にて、人物風流、此地に過ること無し。此時に至ては、古の荆蠻の風俗易り盡て、彬彬たる君子の郷（きやう）となれり。俗既に文雅なれば、語音も隨て正きこと、何れの國も同然なり。明の代の南京は、古の吳國の地なり。南京の音は、天下の正音にて、中華の人も是を則とす。是明朝に、其地を陞（のぼ）せて南京として、帝都に准じ、百官を備てこれを守りしより、學士大夫、搢紳先生の聚まる所となりし故なり。然れども明の代に至て、其土音頓（とん）「にはか」に改りて、かく正くなりたるにはあらず。秦漢以來漸（ぜん）を以て致す所にして、實は南方の風氣の然らしむる所なり。吾國の人の吳音を受しこと、何れの世といふことを知らねども、おもふに其事應神より後に在るべければ、六朝の間、若は唐の初に當るべし。是其時の吳音、既に古の吳音にあらざるべし。何ぞこれを賤めて、邊土の音とすることを得んや。是眞（まこと）に疑はし。漢音といふは、漢の代の京都の音なり。漢の都は、前漢は長安、後漢は洛陽なり。長安を西京（せいけい）西都と稱し、洛陽を東京東都と稱す。此兩都の音を、漢音と名づけて、中原の正音とす。吾國より使を遣して、中華に入貢せしことは、六朝にもこれありといへども、唐の代に當りて、殊に頻頻（ひんぴん）「しげしげ」なりし故に、其使を遣唐使といひ、中華に往くを入唐といふ。されば吾國の禮樂文物、唐の制に倣（なら）へること多く、諸道の

藝術も、唐より傳來れること多し。然るに唐の都も長安なれば、吾國より往し人、皆長安の音を學て歸て、漢音と稱して、此方に弘めし故に、桓武の時に至て、遂に世に行はれしなり。凡吳漢二音の此方に傳はれること、其説詳ならざれども、事理を以て考れば、かくの如くなるべしと見ゆるなり。然れば吳音も漢音も、本皆中華の音なれば、縱展轉（たひてんでん）して訛舛（くわせん）「あやまりたがふ」すとも、今の如くの音にはあらざるべきに、今中華南京の正音を以てこれを律すれば、分毫も似たる處なきは何ぞや。當初何れの國の音を、何人より受て、是を中華の音ぞとおもひて、習ひ傳へけるやらん。怪き事なり。中華の音は、諸を韻書にあらはせる如く、四聲七音、清濁開合、種種（しゆじゆ）の呼法（こほふ）「よびやう」、韻韻各別にして、甚精微なり。此方には四聲分れず、七音明ならず。清濁開合の呼法正からず。衆音混同して、更に辨別なし。是倭語を用て其義を辨じて、字音を用ひざる故なり。然れども千餘年を歴て、かく習ひ來れる音なれば、今是を改て、中華の正音に復すべき様も無ければ、姑（しば）古來の習の如く、兩様の音を學て、字を識り書を讀むべきなり。但此音を中華の音とおもふべからず。其始は中華の人より傳授して、眞の吳音、眞の漢音なるべけれども、今かくの如く訛舛しては、全く吾國の音となりて、中華の音にあらざる故に、姑（しば）これを倭音といふなり。若眞の華音を知んとおもはば、其師に就て問ふべし。筆札に見はしがたし。

倭語説

倭語とは、日本の人の言語なり。倭語に五種あり。一つには天地自然の倭語。生民以來、應神天皇の世まで、文字なかりし時の、吾國の人の言語なり。是眞の倭語なり。今何れの言か、其遺（のこ）ぞといふことを知らず。二つには異國と往來を通じてよりの後の倭語。吾國にあらゆる事物、多くは異國より傳來れる者なれば、是事是物ありて後に、各其名をつけたるなり。三つには文字ありてより後の倭語。中國の文字行はるるに及て、文字を讀むにつきて、此方に無き事物なれども、他の事物に准じて、倭訓を施せるなり。羊をヒツジと訓じ、豹をナカツカミと訓じ、象をキサ

と訓じ、棠棣をカラナシと訓ずる類なり。四つには華音より來れる倭語。中華の人の言語を、そのままに受用ひたるなり。火をホと訓じ、馬をムマと訓じ、君をキミと訓じ、蟬をセミと訓じ、梅をムメと訓ずる類、本皆華音なり。火をヒといふは、ホより轉じたるなり。五つには三韓の語より來れる倭語。上世は三韓と頻頻に往來を通ぜし故に、三韓の人の言語を、そのままに倭語となしたるなり。虎をトラと訓ずるは、高麗の語なりと、或人いへり、此類猶多かるべし。此五種の外に、又古語、今語、雅語、俗語あり。又國字草子の語と、經史詩文に用る倭語と、同からざる者あり。已上種種の倭語、一一に其源委を考へがたし。今吾黨の學者は、中華の文字に通じ、中華の言語に達して、經術を明らめ、文章を作んと志す上は、強に倭語を講究「ならひきはむ」することを用ひずといへども、此國の人にて、此國の言語に味からんも、學者の恥べきことなり。況や今の人は、字を識ること以呂波より始まり、書を読むこと倭語より入るなれば、是を考ふるも、亦學問の一助なり。只習俗に牽れず、典則を失はず、鄙倍に遠ざからんことをおもふべきなり。一説に倭語は王仁より始まりといふ。尤信じがたし。王仁初て吾國に來て、中華の書を授し時、早く倭語に通じて、中華の文字を、一一に翻譯して、倭語となさんこと、容易なるべからず。然れども難波津の歌を觀れば、此方に久く住て、後には倭語に能く通せりと見ゆ。然れば王仁が書を授しは、只彼國の讀法を授たるのみにて、今の如くの倭語の讀は、後人のしわざなるべし。

顛倒讀書文義說

顛倒とは、さかさまなるをいふ。日本の人の言語は、皆さかさまなり。中華の人は、治國平天下といふを、日本の人は、國を治む、天下を平にすといふ。中華の人は無所不至といふを、日本の人は、至らざる所なしといふ類なり。中華の人の先にいふことを後にいひ、中華の人の後にいふことを先にいふ。凡言語皆かくの如く上下顛倒す。此顛倒は、我が日本のみにあらず。中華の外は、東夷西戎南蠻北狄、言語各殊なれども、顛倒せずといふことなし。今吾國の人、中華の書を以て、此方の

語となして、顛倒して讀む故に、文義を害すること多し。此事上古にはこれあるべからず。中古より以來なるべし。其故は、王仁始て吾國の人に書を授し時は、倭語の數も少く、王仁異國の人にて、此方の言語に通ずることも難かるべければ、只異國の音にて、異國の讀を教るに過べからず。其後中華の書多く傳はり、文字の教弘まりて、物の名も定まり、言語の數も多くなりて、中華の文字、民間までに行はる。是によりて學士大夫、書を読む者、中華の字を翻じて倭語となしてこれを讀む。倭語を以て中華の書を読むに、其文を顛倒せざれば、其義通ぜざる故に、遂に顛倒の讀となれり。是何れの時、何人の創けるといふことを詳にせず。世に傳て、吉備公より始めといふ。吉備公片假名を造れるも、倭語を書するに便ならしめん爲なれば、倭語の讀を創けるといふこと、誠にさもあるべし。既に倭語を以て中華の書を読めば、異國の事を視ること、吾國の事を視る如くにて、此方の人に甚便なる故に、海内の人、專是を學て、古の讀法を尋求る者も無ければ、吉備公の前には、如何なる讀法なりしといふことだに傳はらず。中華の文字、徒に侏僂鳥言の用となりて、文章の道是より差へり。吉備公の功は、其罪を掩ひがたからん。今の學者、幼より顛倒の讀を習て、華語を解せざる故に、只かくの如く讀て、其義通ずとおもひて、倭讀の甚義理を害することを知らず。凡言語の道、中華と吾國と大に異なり、中華の書は、中華の人の言語なるを、日本の人の言語にてこれを讀めば、日本の人の言語に異なること無し。華語は上に在り下に在るを以て、一字なれども其義を異にす。不敢といひ、敢不といふが如き、敢の字或は不の字の下に在り、或は不の字の上に在り、不敢と敢不とは、其義正に相反す。然るを倭讀には、あへてといふことを必先にいふ故に、不敢と敢不と相亂ることあり。不必必不も亦然なり。又上に在る一字一句、下の數字數句に被らしむる處あり。是を顛倒に讀めば、必其義を失ふなり。又決して顛倒に讀がたき處あり。又中華には言語の數多く、日本には言語の數甚少し。少きを以て多きに當る故に、字義明ならず。たとへば中華の人は、目にてみることをいふに、視といひ、觀といひ、覽といひ、察といひ、監といひ、瞻といひ、矚といひ、瞰といひ、相といひ、見といひ、觀といふ。かく

の如く諸般の言ありて、其事各殊なるを、吾國の人は、みるといふ一つの言にて止め。耳にてきくことをいふに、聽といひ、聆といひ、聞といふを、吾國の人は、きくといふ一つの言にて止め。千言萬語、皆かくの如し。物の名も、爵、觴、罍、卮、杯、盞は、皆酒器にて、其制各殊なるを、吾國にはさかつきといふ一つの名を通じて、其物の同からざることを知らず。萬事皆此類なり。又倭讀には助語辭を捨て讀まざる故に、あらゆる助字皆無用の字となりて、自然に華語の意味を失ふなり。今の世の儒者、多く書を讀み、能く經術を談じて、頗發明する所あれども、古人の語に於て、靴を隔て、痒を搔が如くなるは、倭語の習、顛倒の弊、俱に痼疾となりて、其靈智を味ます故なり。口に談ずるすら猶然なり。況や文章を作るに至て、倭語の習除かざれば、必字義を誤り、顛倒の弊去らざれば、必文理に違ふなり。著述多しといへども、用を濟さず、勞して功なし。是日本の學者の大患なり。然れば吉備公の國字を造り、倭語顛倒の讀を創けるは、後の學者に甘き毒を啗しめたるにあらざるや。此毒人の骨髓に淪て除きがたし。若これを除んとおもはば、華語を習ふにしくはなし。華語とは中華の俗語なり。今の唐話なり。されば文學に志あらん者は、必唐話を學ぶべきなり。

倭音正誤

凡字音は、人の語音なり。人生れて言ふ。言へば聲あり。聲文を成す、之を音と謂ふ。音ありて後に字あり。字は言語の象に見れたる者なり。人の語音に四聲あり、七音あり、輕重清濁あり、開合あり、韻あり。四聲とは、平上去入なり。人の語音に四聲あるは、天に四時あるが如し。是自然のふしなり。然れども夷狄には四聲備らず。唯中華の人のみ、四聲全く有り。七音とは唇、舌、牙、齒、喉、舌齒、齒舌なり。人の聲、此七處より出て、七様の音となる。是すなはち羽、徵、角、商、宮、半徵、半商なり。此七音は、音の色なり。七音に各清濁あり。清濁又分れて四つとなる。一つに清音、二つに次清音、三つに濁音、四つに清濁音なり。唇音に輕重あり。舌音に舌頭舌上の二音あり。齒音に齒頭、細齒頭、正齒、細正齒の四

音あり。開合は呼法なり。細に分れば、開口、合口、閉口、撮口、齊齒、捲舌、混呼の七様の呼法あり。韻といふは、音のなりをいへり。なりとは、形なり。諸の韻書に載たるは、平聲に上下を分ちて、上平は、一東より、二十八山に至り、下平は、一先より、二十九凡に至り、上聲は、一董より、五十五范に至り、去聲は、一送より、六十梵に至り、入聲は、一屋より、三十四乏に至る。四聲通計して二百六韻なり。是梁の沈約が定めし韻法なり。此二百六韻に、各七音あり、清濁輕重ありて、千聲萬音となる。華音には箇様の辨別ありて、甚精微なり。倭音には、四聲七音清濁開合の名のみありて、其實なし。字音訛舛して、中華の正音にあらざるが故なり。僧家には倭音に四聲を分つことあり。無用の爲なり。其故は、平聲の支脂之微魚虞模歌戈麻凡十韻、上聲の紙旨止尾語麌姥咍果馬凡十韻、去聲の寘志未御遇暮箇過禡凡十韻、三聲共に三十韻は、倭音に響なくして、華音の入聲の如し。是を平上去の三聲には、如何にして呼得べきや。入聲は、倭音に却てフツクチキの響ありて、入聲の體を失へり。是皆侏儻不正の音なり。何の四聲をか分たんや。釈氏の教相を説く者の家に、四聲を點する法あり。其法漢音は常の如し、吳音は、平聲の字をば、點して上聲去聲となし、上去二聲の字をば、點して平聲となす。是尤謂なき事なり。吳音も漢音も、本皆中華の音なれども、展轉訛舛して、今倭音となりたるのみにて、四聲は故の四聲なり。何ぞ吳音に於て、平仄處を易ることあらんや。奇怪の至なり。然れば倭音には四聲なしと知るべし。凡今の學者は、皆倭讀を習ふ者なれば、務て倭音を牢記「かたくおぼゆすべし。先漢音を學び、次に吳音を學て、皆習熟すべし。儒書には漢音を用ひ、佛書には吳音を用ひ、其餘の書は、吳漢兼用て讀むこと、古來の相傳なれば、是に従ふべきこと勿論なり。然れども二音俱に中華の正音にあらざれば、混用すとも何の不可なることかあらん。必しも是に拘泥「かかはりなつむ」すべからず。況や俗間には、二音並行はるれば、書を讀む者、法に拘はりて、人の聽を駭すべからず。必字音を正さんととして、人の聽を駭すは、風雅の道にあらざる。既にして倭音なり。正すとも竟に何の益かあらん。只耳にかからず、聽にくからざる様に、書をば讀べきなり。若必字音を正さん

とおもはば、韻學を講ずべし。韻學は華音にあらざれば明ならず。今の人華音を知らずして、字音を議するは、癡人の夢を説が如し。華音とは、俗にいふ唐音なり。志あらん者は、餘力にこれを學ぶべし。大抵倭音は、古より相承て、吳音漢音各其例あり。平聲の一東より、入聲の三十四乏に至まで、一韻の内にて例を照して相推せば、條理自見ゆるなり。間には例に違へる音あれども、古來讀習はせる音をば、改めざるを故實とす。清濁開合に至ては、正を失へること尤多し。悉改むべからず。其中に字義に關ることあるをば、衆に違ふとも、必これを改むべし。若俗儒の誤れる音は、これを正して人を駭すに至らざるほどは、改正せんこと可なり。今倭音の誤り讀て、義に害ある者若干〔そこばく〕字を學て、初學に示すと左の如し。

上平

形 廣韻に以戎の切、音融、倭音イウ。尚書に高宗彤日の篇あり。註に音容とあるを見て、倭音ヨウと讀むは非なり。華音は東冬の二韻相通じて、融容同音なり。倭音は二韻各別にして、融と容と音異なり、東の韻にはヨウの音なし。馮 人の姓なり。戰國の時、齊に馮驩あり。漢の代に馮唐あり。又諸馮は地名なり。孟子に見えたり。字本東の韻に入る。廣韻に房戎の切、楓風と同音、倭音フウ、若はホウなるべきを、古來フと讀習はせるは誤なり。然れども今改がたし。ヒヨウと讀むは尤非なり。姓と地名との外は、皆音憑、蒸の韻に入る。倭音ヒヨウ、漢音は清み、吳音は濁る。倭語によると訓じ、たのむと訓ずるは、憑の字と同じ。論語の暴虎馮河、毛詩の削屨馮馮、左傳の震電馮怒、漢の左馮翊、皆音憑なり。馮夷の馮も是と同じ。馮夷は、水神の名なり。馮は姓にあらず。文選の註に音憑とあり。フと讀べからず。

充 廣韻に昌終の切、倭音シウ。清て讀べきを、古來濁て讀習はせるは誤なり。然れども今改がたし。

聾 廣韻に盧紅の切。籠籠籠と同音、東の韻に入る。倭音ロウ、龍の字の音に讀むは非なり。龍は冬の韻に入る。漢音リヨウ、吳音リウ。倭音は東の韻にリヨ

ウの音なし。

芄 音蓬、又音馮。俱に東の韻に入る。華音には輕重の異あり。倭音は皆ホウ、輕重なし。毛詩に芄芄たる其麥、ハンと讀べからず。

右東の韻

松 倭音シヨウ。松江を俗儒スンガウと讀むは非なり。ズンは華音の訛れるなり。倭讀は只倭音を用て讀む。是故實なり。松江の松に限て、華音を用ること、何の故ぞや。禪家に松坡といふ者あり。今ズンパと讀む。凡倭讀に華音を雜るは、皆禪家の僧の讀習はせるなり。儒者是に効ふべからず。

邕 廣韻に於容の切、音雍。字冬の韻に入る。漢音ヨウ、吳音イウ。後漢の蔡伯喈が名、俗儒イウと讀むは、吳音なり。字邕に従へる故に、音邕なりとおもへるは誤なり。邕は入聲、倭音イフなり。

濃 廣韻に女容の切。醴醴と同音、倭音チヨウ。字冬の韻に入る、東の韻に入らず。虎關が聚分韻略に、東の韻に誤て此字を入れたる故に、今の詩を作る者、東の韻に此字を押するは非なり。古詩には鄰韻を通押す。近體には、鄰韻を通押することを許さず。

慵 廣韻に蜀庸の切。倭音シヨウ。慵慵の二字、是と同音なり。廣韻慵の字の註に、又音庸とあり。今の人庸の音のみを知て、本音蜀庸の切なることを知らず。

右冬の韻

瀧 廣韻に呂江の切。字江の韻に入る。倭音ラウ。龍の字の音に讀むは非なり。廣韻に又音雙とあり。

逢 廣韻に薄江の切。倭音ハウ。姓なり。孟子に逢蒙あり、左傳に逢丑父あり。又關龍逢は、夏の桀が時の忠臣の名なり。此字逢迎の逢と相似て、字體音義皆異なり。逢迎の逢は冬の韻に入る。此字は江の韻に入る。混同すべからず。

右江の韻

義 廣韻に許羈の切。倭音ギ。清て讀べし。尚書の義和、晉の王羲之、唐の儲光羲、皆此字なり。字體仁義の義に似たる故に、俗儒濁音に讀むは非なり。學者字

體を審にすべし。義の字は牙音の去聲、此字は喉音の平聲なり。華音大に異なり。倭音は平仄を別たず、二音相似て清濁あるのみなり。穢曠の二字、皆此字に從へて、是と同音なり。並に清て讀べし。

麗 高麗の麗、魚麗の麗、皆支の韻に入る。廣韻に呂支の切、離驪と同音、倭音リ。高麗を倭音ライと讀むは誤なり。

衰 盛衰の衰は所迫の切。等衰の衰は楚危の切。並に支の韻に在て、華音別なり。倭音は皆スイ。異なること無し。晉の趙衰は、等衰の衰なり。俗儒左傳の註に初危の反とあるを見て、倭音シと讀むは誤なり。危の字合口呼の字にて、

華音グイなる故に、初危の反スイなり。穢の字も、廣韻には盛衰の衰と同音なり。孟子に穢題數尺、朱註に穢は楚危の反とあり。俗儒倭音シと讀むは誤なり。孟子に穢題數尺、朱註に穢は楚危の反とあり。俗儒倭音シと讀むは誤なり。

綏 音蕤。廣韻に儒佳の切。倭音ズイ。濁て讀べし。俗儒清て讀むは、字體綏に似たる故に、誤て混同せるなり。綏は息遺の切、倭音スイ、清て讀む。綏の字を綏に作れる處、古書にもあるは、字形相似たる故に誤れるなり。

右支の韻

車 此字本麻の韻に入る。廣韻に尺遮の切、倭音シヤ。又魚の韻に入る。九魚の切、音居、倭音キヨ。二音其義異なることなし。古の歌詩の韻に、居の音を用たる處多し。子車氏の車を、左傳の註疏には、居の音に讀めり。毛詩の註疏には、音註なし。字彙には本音の下に出せり。又字彙には居の音の下に、戎車革車を出せり。何に據れるといふことを知らず。字彙に又曰く、古は惟遮韻、自漢以來、始有居音と。然れば歌詩の韻に、居の音にて押したる處を除て、其餘は皆本音に讀へきなり。今人論語の大車を、居の音に讀こと非なり。

右魚の韻

娛 虞愚と同音。倭音グ。今人ゴと讀むは、字體を見て誤れるなり。芻 廣韻に測隅の切、倭音スウ。孟子に芻蕘者往焉。俗儒朱註に芻音初とあるを見て、倭音シヨと讀むは非なり。初の字は魚の韻に入る。華音は魚虞の二韻相

通ず。倭音は、虞の韻にシヨの音なし。巫 音無。漢音はブ。濁て讀む。俗儒清て讀むは非なり。吳音はムなり。誣の字も是と同じ。

須 廣韻に相兪の切、倭音シユ、又スウと讀む。俱に古來の讀なり。佛家にはスウの音を用ひず。

需 周易に需の卦あり。音須。廣韻に相兪の切、倭音シユ。清て讀べきを、古來濁て讀むはせり。儒濡濡嚙婦の五字は、並に人朱の切、倭音シユ。濁て讀む。

兪 倭音ユと讀むは、本音なり。平上去の三聲に通ず。又輸の音あり。倭音シユ。漢の變布が封ぜられし國の名なり。又人身の兪穴の兪は、脛と同じ。音輸の去聲。或は輸に作る。史記の扁鵲が傳に、因五藏之輸とあるを、索隱に束注の反と註せり。輸の字に平去の二聲あり。此時は去聲なり。然れども世の醫書を讀む者、兪の字をば只本音の如く讀て、シユと讀まず。輸の音なることを知らざるなり。

輸 廣韻に式朱の切、倭音シユ。孟子の公輸子を、俗儒ユと讀む者あり。字體に因て誤れるなり。佛書に耶輸多羅女あり。釈氏の徒シユと讀む。

右虞の韻

徒 倭音トと讀むは常なり。明法家の故實に、律の笞杖徒流死の徒を、ヅと讀むは、華音の遺れるなり。

烏 廣韻に哀都の切、倭音フなるべきを、古來ウと讀むはせるは、華音の遺れるなり。今必しも改めず。烏獲烏江の烏を、俗儒フウと讀む、謂なき事なり。都 倭音トと讀むは常なり。ヅと讀ことあるは、華音の遺れるなり。

右佳の韻

淮 廣韻に戸乖の切。懷槐と同音。倭音クワイなるべきを、古來ワイと讀むはせるは、華音の遺れるなり。吳音はエなり。

右佳の韻

煨 廣韻に烏恢の切、音隈。倭音ワイ。醫家にワイと讀むは、華音なり。嵬 廣韻に五灰の切、倭音グワイ。濁て讀べし。俗儒清て讀むは非なり。

推 推たいこたい推たいこたい敲たいこたいの推、手にて擠をす類は、灰の韻に入る。廣韻に他回の切、倭音タイなり。スイと讀べからず。法華經の推落大火坑きやうを、釈とち氏の徒とち、スイと讀むは誤なり。

右灰の韻

諄 廣韻に韋倫の切、倭音シユン。清て讀べし。俗儒濁て讀むは非なり。醇鶉淳の三字は、純專と同音、濁て讀む。字體相類せる故に、誤て其音を混同す。

遵 廣韻に將倫の切、倭音シユン、清て讀べし。濁て讀むは非なり。

右眞の韻

軍 音君。廣韻に舉云の切、倭音クン。清て讀べきを、古來濁て讀よみ習はせるは、君の字の音を避さげたるなるべし。今改がたし。

右文の韻

灘 廣韻に他干の切。音嘆の平聲、倭音タン。清て讀べきを、人多く濁て讀むは、難の字と混同せるなり。攤の字是同音なり。

豌 廣韻に一丸の切、音剋、倭音ワン。字寒の韻に入る。豌豆は豆の名なり。俗エあやまンドウと呼ぶ。エンの音訛あやまれり。

右寒の韻

下平

咽 廣韻に烏前の切。音煙、倭音エン。先の韻に入る。人の咽喉なり。今醫書を讀

む者、インと讀むは、字體に因て誤れるなり。

鞭 廣韻に卑連の切、倭音ヘン、清て讀べし。和漢朗詠集に、刑鞭蒲腐螢空去といふを、昔より清て讀む是非なり。

員 廣韻に王權けんの切、音圓、倭音エン、先の韻に入る。物數官數なり。又幅員はたばりなり。又方圓の圓と通ず。又音云。文の韻に入る。語助なり。又音運。問の韻に入る。伍子胥が名なり。此二音は俱に倭音ウンなり。官員の員を、俗儒インと讀むは非なり。三音の外に、別にインの音なし。官員の員、先の韻に入て、圓の音なれば、倭音エンと讀べきなり。官名に員外郎あり。

右先の韻

澆 廣韻に堅堯の切、音梟、倭音キヤウ。清て讀べし。俗儒濁て讀むは、字體に因て誤れるなり。

僥 僥幸の僥、微と通ず。音澆。清て讀べし。僥僥の僥は音堯。廣韻に五聊の切。僥は國名、家語に見えたり。

髻 聊遼參寮と同音、倭音リヤウ。毛詩に取其血髻。俗儒勞ろうの音に讀むは、形の似たるに因て、誤れるなり。蕭の韻にはラウの音なし。

輶 廣韻に遙韶の二音あり。倭音ヤウ、ジャウ。字彙には韶じやうの音を載せず。文選の註にも、遙やうの音を書せり。

右蕭の韻

梢 廣韻に所交の切。鴆鴆しやうしやうと同音、倭音サウ。肴の韻に入る。俗儒シヤウと讀むは、吳音なり。

鈔 廣韻に楚交の切、音譟、漢音サウ、吳音シヤウ。古來吳音を用ふ。抄の字是同し。俗字なり。

嘲 廣韻に陟交の切、音啁、倭音タウ。俗儒チヤウと讀むは、吳音なり。揚雄が文に解嘲かいちやうあり。

右肴の韻

醪 廣韻に魯刀の切、勞牟と同音、倭音ラウ。俗儒リヤウと讀むは、字體に因て誤れるなり。

右豪の韻

娑 廣韻に素何の切、倭音サ。字歌の韻に入る。釈とち氏の徒とちシヤと讀むは、字體に因て誤れるなり。歌の韻にシヤの音なし。俗儒釈な氏に効なふは更に非なり。娑の字是同音なり。

莎 廣韻に蘇禾の切、葦稜しやうと同音。上の娑の字と、音相似て同からず。娑は開口呼、莎は合口呼なり。華音別なり。倭音は娑と同じ。俗儒シヤと讀むは誤なり。

右歌の韻

右歌の韻

嗟 廣韻に子邪の切、音置、倭音シヤなるべきを、古來サと讀習はせり。今改がたし。

龜 蛙と同じ。廣韻に烏瓜の切、倭音ワなるべきを、古來アと讀習はせり。今改がたし。蜆ち龜は人の名、孟子に見えたり。窠な注な窪な哇な、汗尊の汗、是と同音なり。汗尊は、禮記の禮運に見えたり。

右麻の韻

坊 此字廣韻に房方の二音あり。清て讀み、濁て讀む、皆か可なり。倭音バウ、ハウなり。

襄 廣韻に息良の切。廂湘相細箱栢と同音、漢音シヤウ、吳音サウ。俱に清て讀べきを、古來濁て讀習はせるは誤なり。然れども今改がたし。纏な襻な驤な壤な穰なの五字、是と同音なり。

嘗 廣韻に市羊の切、音常、倭音シヤウ。濁て讀べきを、常に清て讀むも害なし。然れどもやく禘嘗烝の嘗は、必濁て讀べし。倭音烝の字と相亂みだる故なり。我朝の禮に、大嘗會だいじやうゑ新嘗會しんじやうゑあり。嘗の字皆濁て讀習はせり。裳な縗なの二字、是と同音なり。

右陽の韻

榮 水の名なり。廣韻に戸けい扇の切。榮な螢なと同音、倭音ケイ。今人エイと讀む者あり。非なるに似たり。然れども字彙に干平の切、音榮とあれば、誤にもあらずと見ゆ。榮な螢なの二字と榮の字と、華音は同じ。倭音は別なり。

右青の韻

蒸 廣韻に衰しよじやう仍の切、倭音シヨウ。清て讀べし。俗儒濁て讀むは非なり。烝の字是と同音なり。

右蒸の韻

硫 硫黄なり。廣韻に力求の切、劉留流と同音。漢音リウ、吳音ルなるべきを、古來ユと讀み、或はイと讀む、皆非なり。然れども藥の名にて、世俗に通行せる音なる故に、今改がたし。

右尤の韻

龜 廣韻に口含の切、堪截と同音、倭音カン。清て讀べきを、古來濁て讀習はせるは誤なり。

右覃の韻

上聲

隨 廣韻に息委の切、倭音スイ、清て讀べきを、古來濁て讀習はせり。隨の字に類せる故に誤れるなり。

跬 廣韻に丘び弭の切、音頰、倭音キ。字紙の韻に入る。俗儒ケイと讀むは、字體に圭の字あるを見て誤れるなり。

時 廣韻に諸市の切、音止、倭音シ。清て讀べし。然れども廣韻に又時止の切とあり、濁て讀むも可なり。

右紙の韻

甫 廣韻に方矩の切。斧な府なと同音。倭音フなるべきを、古來ホと讀習はせり。今改がたし。脯な薑な黼なの三字も、是と同音なり。

輔 廣韻に扶雨の切、父腐釜と同音、倭音フなるべきを、古來ホと讀習はせり。今改がたし。唯我朝の八省たの太輔少輔は、古來フと讀習はせり。父母の父、是と同音なり。尼父尚父なの父は、上の甫の字の音なり。

虜 廣韻に郎古の切、魯な函なと同音。字麋の韻に入る。倭音ロなり。俗儒リヨとよむは誤なり。麋の韻にリヨの音なし。虜の字も是と同音なり。

五 廣韻に疑古の切、音午。字麋の韻に入る。倭音ゴ。俗儒ギヨと讀む者あり、非なり。麋の韻にギヨの音なし。

滌 廣韻に呼古の切、音虎。字麋の韻に入る。倭音コ。俗儒キヨと讀むは、字體に因て誤れるなり。麋の韻にキヨの音なし。水滌傳は書の名、コと讀む。

普 廣韻に滂古の切、音浦、漢音ホ、吳音フなり。今多くは吳音を用ふ。溥の字是と同音なり。毛詩の溥な天な之下、中庸の溥博淵泉、皆フと讀習はせり。

譜 廣韻に博古の切、補圃と同音、倭音ホなるべきを、古來フと讀習はせり。上の

普薄の二字の類なり。

右麩の韻

醍 廣韻に他禮の切、體涕禪と同音、漢音タイ、吳音タイ。醍醐の醍を、釋氏の徒
ダイと濁て讀むは誤なり。

右齋の韻

賄 廣韻に呼罪の切、音悔、倭音クワイ。賄賂を今人ワイロといふは非なり。悔の
字に准ずれば、吳音ケなるべし。今ワイといふは、吳音にもあらず。

愷 豈弟の豈是と同じ。又凱に作る。廣韻に苦亥の切、音開の上聲、倭音カイ。清
て讀べし。俗儒濁て讀むは誤なり。增鏡の二字、是と同音なり。

右賄の韻

軫 廣韻に章忍の切、倭音シン。俗儒チンと讀むは誤なり。疹贅紵縵診疹縵の七字、
是と同音なり。

敏 廣韻に眉殞の切。愍閔暨と同音、倭音ビン、濁て讀べし。俗儒清て讀むは非な
り。

右軫の韻

吻 廣韻に武粉の切、音文の上聲、倭音ブン、濁て讀べし。俗儒清て讀むは非なり。
刎杖の二字、是と同音なり。

右吻の韻

縮 廣韻に烏板の切、倭音ワン。漢の盧縮を、今人クワンと讀むは、字體に因て誤
れるなり。

赧 廣韻に奴版の切、倭音タン、濁て讀べし。俗儒清て讀むは誤なり。周に赧王あ
り。

右漕の韻

輓 軟と同じ。廣韻に而亮の切、倭音ゼン。醫書に脉をいふに、軟の字を用て、倭
音ナンと讀習はし、佛書に柔軟の字あるを、釋氏の徒ナンと讀習はせり。

皆非なり。此字銑の韻に入て、ナンの音なし。今按ずるに、悞の字に糯煖〔な

ん〕の二音あり。又此字と通することあり。是によりて、誤て輓の字を煖の

音に讀るなり。然れども悞の字は本弱の義、怯の義、輓の字は柔の義なり。

喘 廣韻に昌亮の切、音舛、倭音セン、清て讀べきを、古來濁て讀習はせり。今改
がたし。

右銑の韻

朶 朶と同じ。廣韻に丁果の切、倭音タ、清て讀べし。濁て讀むは非なり。唾の字
是と同音なり。薩埵を、釋氏の徒清て讀む。

妥 廣韻に他果の切。倭音タ。清て讀べし。

右啻の韻

仰 廣韻に魚兩の切、倭音ギヤウ。濁て讀べし。

杏 廣韻に何梗の切、音荇、倭音カウ。常にキヤウと讀むは、吳音なり。
騁 廣韻に丑野の切。逞程と同音、倭音タイ。俗儒ヘイと讀む者あり。聘の字に似
たる故に誤れるなり。

右梗の韻

紐 廣韻に女久の切、倭音チウ、濁て讀べきを、今人丑の字の音の如く、清て讀む
は非なり。鈕鈕の二字、是と同音なり。杻の字も、木の名は是と同音なり。

手械〔てかせ〕の杻は音丑なり。

否 可否の否、倭語にいなといふは、有の韻に入る。廣韻に方久の切、音缶、倭音
フなり。臧否の否は、補美の切、音鄙。否塞の否、卦名の否は、符鄙の切、

音圮、皆紙の韻に入る。華音は清濁の異あり。倭音は皆ヒなり。安否を、世
俗ヒと讀むは誤なり。

右否の韻

牖 字有の韻に入る、廣韻に與久の切。酉誘貞櫛莠莠莠と同音、倭音イウ。俗儒ヨ
ウと讀むは誤なり。字體片に従へ、戸に従へ、甫に従ふ。右傍〔つくり〕庸
の字に似たる故に、音を誤れるなり。

畝 廣韻に莫厚の切。杜某拇と同音、倭音ボウ、又はボ、濁て讀べきを、古來ホと清て讀習はせり。今改がたし。

斗 南斗北斗は、星の名なり。廣韻に當口の切、倭音トウなるべきを、古來トと呼ぶ。南斗の斗を、主の音に讀こと、俗儒の誤にて、謂れなき事なり。既に斗の名まぎるる故に、南北の字を加たり。主の音は、水を斟む器の名なり。周禮の春官鬯人に見えたり。廣韻に料に作る。料は禮記の喪大記に見えたり。廣韻に古厚の切。苟狗垢笱耇と同音、倭音コウ。枸杞を、常にクコといふは、一字俱に吳音なり。又矩の音あり。麴の韻に入る。枳枸は木の名、毛詩に見えたり。此方にては、けんほのなしといふ者なり。

右有の韻

去聲

甕 瓮と同じ。送の韻に入る。廣韻に烏貢の切、倭音ヲウ。俗儒ヨウと讀むは非なり。送の韻にはヨウの音なし。甕の字も是と同音なり。

右送の韻

箒 或は替に作る。廣韻に徐醉の切、遂穗と同音、倭音スイ。彗星を、古來ケイと讀むは誤なり。廣韻に又音歳、倭音セイ。又内内ないないの切、倭音デイ。

率 此字去聲に二音あり。俱に眞の韻に入る。一つは將帥すいの帥と通用す。倭音スイ。一つは音類、倭音ルイ。字彙に總率也と註して、倭語におほむねといふ義なり。此時或は類の字を用ふ。俗儒多くは是を知らず。

帥 此字本入聲、質の韻に入る。倭音シュツ。論語に子帥ひき以正とある是なり。又去聲眞の韻に入る。廣韻に所類の切、倭音スイ、將帥なり。我朝の官に太宰帥だざいのすいあり。將帥の帥なるを、古來ソツと呼ぶは誤なり。

右眞の韻

恕 廣韻に商署の切、音庶、倭音シヨ。清て讀べきを、古來濁て讀習はせるは誤なり。然れども今改がたし。

絮 綿と訓ずる時は、息據の切、倭音シヨ。清て讀べきを、古來濁て讀習はせり。

又絮羹ちよかうの絮は、抽據の切、倭音チヨ、曲禮に見えたり。又尼據の切、音女、倭音チヨ、姓なり。漢に絮舜あり。

右御の韻

戍 邊へんを守るを戍といふ。廣韻に傷遇の切、倭音シユ、清て讀べし。濁て讀むは誤なり。

右遇の韻

細 字霽の韻に入る。廣韻に蘇計の切、音婿、倭音セイなるべきを、古來サイと讀習はせり。濟歳等の字を以て例するに、是吳音なるべし。今改正しがたし。婿をば今セイと讀む。俗儒或はサイと讀むは、音註に音細とあるを見て、細の字の漢音セイなることを知らずして、吳音に従へるなり。或は字體に因て、シヨの音に讀むは、更に非なり。

祭 此字も本霽の韻に入る。祭祀しの祭なり。廣韻に子例の切、倭音セイ。又卦の韻に入る。國の名なり。春秋に祭伯あり。又姓なり。後漢に祭遵あり。俱に側界の切、倭音サイなり。然れども祭祀の祭をも、古來サイと讀習はして、セイの音あることを人知らず。サイは是亦吳音なるべし。際さいの字も、祭祀の祭と同音なるを、古來サイと讀む。今皆改がたし。

滯 廣韻に直例の切、音穢、倭音ライ。常にタイと讀むは、是亦吳音なり。

右霽の韻

盼 顧盼、轉盼、盼睐、美目盼兮の盼、本盼もとに作る。字諫の韻に入る。廣韻に匹覓ひきの切、倭音ハン。俗儒メンと讀むは、誤て眇の字と混同せるなり。眇は廣韻に莫甸の切、音麪、斜視と註せり。ひづめて視るなり。又説文に目偏ひた合ふ也とあり。一目「かため」を開て、一目にて視るなり。盼の字と音義俱に異なり。盼を俗誤て眇に作る。盼は本別字なり。廣韻に五計の切、又下戻の切、華音は二切別なり。倭音は皆ケイ、恨視と註せり。孟子の盼盼然はんげいめん是なり。毛詩の美目盼兮の盼は、今人ハンと讀む。顧盼の盼は、メンと讀む。盼盼はんげいめんの三字を混同して、字を誤り、亦音を誤れり。學者辨知すべし。眇の字、字彙

には莫典の切、音勉とあり、上聲なり。

右諫の韻

乍 字馮の韻に入る。廣韻に鋤駕の切、倭音ザ、濁て讀べきを、今清て讀むも害なし。醫書に乍寒乍熱の語あり。學者サクと讀むは誤なり。

右馮の韻

向 本許亮の切、香の去聲、漢音キヤウ、吳音カウ、向背の向なり。又式亮の切、音餉、倭音シヤウ、地の名なり、姓なり。左傳に晋の羊舌肸が字叔向、漢の劉子政が名向は、皆向背の向なり。俗儒シヤウと讀むは誤なり。

右漾の韻

畜 牛馬羊犬豕雞を六畜といふ。字本聿に作る。宥の韻に入る。廣韻に許宥の切、倭音キウ。六畜を、世俗チクと讀むは非なり。

宿 星宿の宿は去聲。廣韻に息救の切。秀繡と同音、倭音シウ、又本音入聲に讀むも可なり。古來二音あり。入聲に讀むを誤といふべからず。

幼 字宥の韻に入る。廣韻に伊謬の切、倭音イウなるべきを、古來エウと讀習はせるは誤なり。然れども今改がたし。

右宥の韻

入聲

族 廣韻に昨木の切、倭音ソク、濁音なり。俗儒シヨクと讀むは非なり。倭音は屋の韻にシヨクの音なし。

畜 廣韻に許竹の切、倭音キク、養と訓ず。又丑六の切、倭音チク、畜止「とどむ」儲畜「たくはふ」の畜なり。周易の大畜小畜是なり。又蓄に作る。畜産畜生は、養の義なるを、釋氏の徒チクと讀むは誤なり。

右屋の韻

沃 廣韻に烏酷の切、倭音ブク。曲沃は、地名なり。俗儒ヨクと讀むは非なり。字彙に音屋とあり。逦の字是と同音なり。

右沃の韻

帥 廣韻に所律の切、倭音シユツ。俗儒ソツと讀むは非なり。字質の韻に入る。ソツの音なし。太宰帥を、古來ソツと呼こと誤なり。已に前に見えたり。率驛の二字、是と同音なり。

卒

廣韻に子聿の切、倭音シユツ、終と訓ず。大夫の死を卒といふ。俗儒ソツと讀むは誤なり。字質の韻に入る。ソツの音なし。士卒の卒、倉卒の卒は、俱に月の韻に入る。士卒は臧没の切、清音なり。倉卒は倉没の切、次清音なり。華音は二音別なり。倭音は別なし、皆ソツなり。

右質の韻

祓 廣韻に敷勿の切。音拂、倭音フツ、災を除く祭なり。倭語にはらひといふ。俗儒バツと讀むは誤なり。字示に従ふ。禾に従ふるは非なり。穧は別字なり。字彙に蒲發の切、音鉢、禾傷る也とあり。祓は一つに弗に作る。毛詩に以弗無子とあり。

右勿の韻

虐 字藥の韻に入る。廣韻に魚約の切、倭音ギヤク。俗儒ゲキと讀むは非なり。藥の韻にゲキの音なし。瘡の字是と同音なり。

諛 廣韻に虚約の切、倭音キヤク、清て讀べし。俗儒濁て讀むは、誤て虐の字の音と混同せるなり。虐は牙音、諛は喉音なり。華音大に異なり。

魄 落魄の魄、藥の韻に入る。廣韻に他各の切。託囊柝と同音。倭音タク。俗儒ハクと讀むは誤なり。魂魄の魄と、音義俱に異なり。或は毛に従へて、魄に作る。魂魄の魄は、陌の韻に入る。

右藥の韻

適 字本陌の韻に入る。廣韻に施隻の切。音釋、漢音セキ、吳音シヤク、倭語にゆく、かなぶ、まさに、たまたまといふ。皆此音なり。適來、閑適、適悅、俗語の適纒、皆是なり、又錫の韻に入る。都歴の切、音的、漢音テキ、吳音チヤク。論語の無適、無莫、左傳の吾誰適從、毛詩の誰適爲容、皆此音なり。又嫡の字と通用す。此外は皆釋の音なり。俗儒是を知らず、一槩に的の音に

讀むは誤なり。程伊川敬の字を解するに、主一無適の語あり。俗儒アキと讀む。唐の詩人に高適、李適之あり。唐詩を讀む者アキと讀む、皆誤なり。此等の適の字、並びにセキと讀べし。

右陌の韻

楫 字葉の韻に入る。廣韻に即葉の切。接睫と同音、倭音セフ。俗儒シフと讀むは非なり。葉の韻にシフの音なし。字又楸に作る。

摺 摺疊の摺。葉の韻に入る。廣韻に之涉の切。豐備摺と同音、倭音セフ。俗儒シフと讀むは非なり。

右葉の韻

乏 字洽の韻に入る。廣韻に房法の切、倭音バフ。世俗ボクと讀むは非なり。常に貧乏といふ是なり。

右洽の韻

右古來倭音の誤、必正すべき者、大略此類なり。自餘は必しも改正せず。古來の習の如く讀べし。世の俗儒多くは字音を明めず。訛謬相承て、其非を知らず。自誤のみならず、往往に人を誤らしむ。是眞に畏るべし。又倭讀の法に、其字の正音にあらざれども、他の字にまぎることあるをば、音を別ちて讀むを、故實とすることあり。初學是を知べし。今數字を左に列す。

空 廣韻に苦紅の切、漢音コウ、呉音クウ。六官の司空を、漢音に讀めば、司寇の倭音とまぎるる故に、此字をば呉音に讀なり。

嘗 廣韻に市羊の切、音常、倭音ジャウ。本濁るべき音なれども、常に清て讀む。唯四時の祭を言ふに、禱嘗 烝といふ。嘗を清て讀めば、烝の字と倭音まぎるる故に、必濁て讀なり。

驚 廣韻に舉卿の切、京荊と同音、漢音ケイ、呉音キヤウ。醫書を讀むに、驚風 驚悸の類、凡驚の字皆呉音を用て、漢音を用ひず。但七情を言ふに、喜怒哀憂 思悲驚恐といふ。驚の字必漢音に讀べし。驚の呉音、恐の漢音とまぎるる故なり。

情 廣韻に疾盈の切、音晴、漢音セイ、呉音ジャウ。儒書には漢音を用ふべけれども、性情の二字、並出ること多ければ、漢音に讀ては、性と情とまぎるる故に、此字をば呉音に讀なり。

鹹 廣韻に胡讒の切、咸函と同音、倭音カン。常には清て讀習はせれども、醫書に五味を列たる處あるを、清て讀めば、甘とまぎるる故に、此字を必濁て讀なり。

衛 廣韻に于歳の切、漢音エイ、呉音エ。醫書には吳漢の二音を兼用ふべけれども、此字は多く漢音に讀む。唯榮衛の衛をば、必呉音に讀む。榮の字と倭音まぎるる故なり。

艮 卦の名なり。廣韻に古恨の切、倭音コン。本清て讀べきを、八卦の中にて、坤の字と倭音まぎるる故に、此字をば濁て讀るなり。正音にはあらず。

中華にて古文異體の字、或は法帖などの草字の朦朧として讀がたきに、眞字を以て毎字の傍に附註するを、釋文といふ。又佛書の梵文に、漢字を以て其音を附註するを、對譯といふ。一つには對註といふ。吾國にて漢字の讀がたきに、國字（かな）を以て傍に其音を附書するは、梵文の對譯の類なり。此事胡亂にすべからず。且平聲の韻を以て言ふに、支微魚虞齊佳灰眞文元寒刪先歌麻侵覃鹽咸の十九韻は、明白にしてまぎることなし。東冬江蕭肴豪陽庚青蒸尤の十一韻は、倭音に皆ウの響ありて、口に呼ぶ所、混同して別なき故に、鹵莽の學者、往往に國字「かな」の對譯を誤る。此事大義に關るにあらざれども、吾國の學士家の法故にて、自然の條理、紊亂すべからざる者あり。何ぞ忽諸することを得んや。故に其の要領を此に錄して、童蒙に示す。

東の韻 東の字倭音トウなり。故に此韻に屬する字は、必ラコソトノホモロの下に、ウの聲を附るなり。例せば翁公葱通豐蒙籠の如き是なり。又イキシチリの下に、ウの聲を附る字あり。熊弓終中隆の如き是なり。餘は推て知べし。

冬鍾の韻 冬の字倭音トウ。東の字と同じ故に、此韻に屬する字は、東の韻と異なること無し。例せば攻宗炆農墮の如き是なり。別に鍾の韻に屬する字あり。

鍾の字倭音シヨウなり。故に此韻の屬する字は、必ヨ、キヨ、シヨ、チヨ、リヨの下に、ウの聲を附るなり。例せば容恭衝重龍の如きはなり。餘は推て知べし。

江の韻 江の字倭音カウなり。故に此韻に屬する字は、必アカサタナハマラの下に、ウの聲を附るなり。例せば朕腔臆椿臆邦彫瀧の如きはなり。

蕭宵の韻 蕭宵の二字倭音シヤウなり。故に此韻に屬する字は、必ヤ、キヤ、シヤ、チヤ、ニヤ、ヒヤ、ミヤ、リヤの下に、ウの聲を附るなり。例せば妖驕燒朝饒標猫聊の如きはなり。

肴の韻 肴の字倭音カウなり。故に此韻に屬する字は、對譯江の韻の如し。例せば顯交梢啣鏡包茅茅類の類なり。但此韻の字には、蕭の韻と其音相通する者あり。多くは呉音なり。其の對譯蕭の韻の如し。

豪の韻 肴の韻と同じ。例せば慶高騷刀獠褒毛勞の如きはなり。但此韻には蕭の韻と相通する音なし。

陽唐の韻 陽の字倭音ヤウなり。故に此韻に屬する字は、對譯蕭の韻の如し。例せば羊董商張嬢良の類なり。唐の字倭音タウなり。故に此韻に屬する字は、對譯江の韻の如し。例せば鴛剛桑當囊滂茫郎王の類なり。参考すべし。又光の字の如きは、クワの下にウの聲を附るなり。

庚耕清の韻 庚耕の二字、倭音カウなり。故に此韻に屬する字は、對譯江の韻の如し。例せば嬰阮爭燈儻彭盲横の類なり。又觥の字の如きは、クワの下にウの聲を附るなり。此クワウといふ音は、陽庚の二韻に限り有り。清の字漢音は明白なり。呉音シヤウなる故に、此韻に屬する字の呉音、陽の韻に似たり。故に對譯も陽の韻の如し。例せば嬰京精評明の如きはなり。

青の韻 漢音は明白なり。呉音シヤウなる故に、此韻に屬する字の呉音、庚の韻の字の呉音と同じ。對譯も庚の韻の字の呉音の如し。例せば經星丁寧嵬冥靈の如きはなり。

蒸登の韻 蒸の字は倭音シヨウ、登の字は倭音トウなり。此韻の對譯、冬の韻の如

し。例せば膺兢升徵氷陵の類は、蒸の韻に屬す。絙僧騰能崩の類は、登の韻に屬す。

尤幽の韻 尤幽の二字は倭音イウ。侯の字は倭音コウなり。此韻の對譯、東の韻の如し。例せば優鳩脩抽柔彪繆劉の類は、尤幽の二韻に屬す。詭鈞涑兜孺衰咽樓の類は、侯の韻に屬す。

右平聲の韻を明す。上去の二聲は、是を以て例推すべし。入聲は、下にツクチキの聲ある故に明白なり。唯緝合盍葉帖洽狎業乏の九韻、下にフの聲ありて、其字を呼ぶこと、平上去の三聲の字に似ることあり。故に動ば對譯を誤る。緝の韻に屬する字は、イキシチニヒミリの下に、フの聲を附るなり。例せば邑急執繫入鷓立の如きはなり。合盍洽狎乏の五韻に屬する字は、皆アカサタナハマラの下に、フの聲を附るなり。例せば始閏市答納法臘の如きはなり。葉帖業の三韻に屬する字は、皆エケセテネヘメレの下に、フの聲を附るなり。例せば嘩嬋聾輒聶獵の如きはなり。他はまぎることなければ、逐韻に明さず。又舌音のチツと、齒音のシスと、清音は分明なり。濁音は混同しやすし。忸怩の二字の如きは、並に舌音なる故に、チの濁音なり。尋常の二字は、並に齒音なる故に、シの濁音なり。除の字は舌音チヨなり。徐の字は齒音ジヨなり。圖の字は舌音なる故に、呉音ヅなり。隨の字は齒音ズイなり。他は例推すべし。又齒舌音日母に屬する字は、齒音に従て、シスの濁音なり。日の字漢音ジツなり。女の字の如き、本男女の女、舌音なる故に、漢音チヨなり。爾女の女は、汝と同じ。日母に屬して、漢音ジヨなり。他は推て知べし。初學の士、上の諸例に隨て、各韻母字母を視て、其音を考へば、對譯に於て差誤なからん。慎て草草にすることなかれ。

○佛家に陀羅尼あり。皆梵語なり。本梵字にて書たるを、中華の人、梵字を讀することあたはざる故に、佛書を翻譯する者、漢字の梵音に合へる者を、其傍に附書して、漢字の音を以て、梵字を讀しむる、是を對譯といふ。或は對註といふ。既に對譯しつれば、其後は梵字存せざれども、對譯の漢字を以て、梵音を傳て、陀羅尼をば誦するなり。梵語を傳ふるのみ、かくの如くなるにあらず。四方萬國の語を傳ふるこ

と、皆かくの如し。鶴林玉露に日本の語を記して、筆を分直といひ、硯を松蘇利といふといへる類の如き、皆此例なり。然れば陀羅尼を讀んには、對譯の字を、必華音に讀べきなり。華音にも、南北土音の異なることあれば、若精くせんとならば、譯者の郷里を尋て、其の郷音に従ふべし。さもあらば梵音を失はざるに近からん。然らずは、梵音を去こと遠かるべし。今此方にて、釋氏の徒、陀羅尼を誦するは、倭音を以て讀む。囊莫を、ナウマクと讀み、摩訶を、マカと讀み、般若波羅密多を、ハンニヤハラミツタと讀が如き、是皆倭音なり。是何ぞ梵音ならんや。分直、松蘇利を、倭音に讀めば、倭語のフンで、必ずりに合はざるを以て、推て知べし。陀羅尼は天竺の歌詩にて、諷詠すべき者なれば、其用聲音に在り、聲音の道微妙なり。佛徳を讚歎し、鬼神を感格せしめ、災を禳ひ福を祈り、心を澄し徳を養ふこと、皆聲音の力なる故に、彼の家にこれを聲明といふ。左傳の語を取て名づけたるなり。然るに梵語の本音を失ては、陀羅尼の功少かるべし。況や今の僧の陀羅尼を誦するは、諷詠の意なくして、只水中の蛙の鳴が如く、耳に聒きのみなれば、梵音を去こと益遠かるべし。中華の僧の經を讀み、陀羅尼を誦するは、諷詠の意ありて、聲音響亮〔ひびきさゆる〕なる故に、聽く者感慨を起さずといふことなし。

○倭讀の法に、本濁、新濁、連聲といふことあり。是佛家の名目にして、儒家にも此事なきにあらず。本濁とは、本來濁れる音をいふ。新濁とは、本清て讀べき字なれども、兩三字連屬せるを、音便に隨て、下の字を濁て讀ことあるをいふ。南山東方といふが如き、山方皆濁て讀む。是新濁なり。連聲とは、喉音影喩の二母に屬する字を、連屬の音便にて、ナニヌネノ、或はタチツテトの音に呼ぶをいふ。天王の王をナウと呼び、越王の王をタウと呼び、南音をニンと呼び、八音をチンと呼が如き是なり。又遠方葛伯といふが如き、方伯の二字、唇を合せて呼ぶ。華音の幫滂の二母を呼が如し。此方には是を半濁といふ。國字〔かな〕の肩に、一小圈〔ちいさきまる〕を加へて號とす。是も連聲なり。又釋氏の書には、四聲を點發するに、倭音濁て讀む字には、二小圈を點す。本濁は横に雙べ、新濁は直に累ぬ。儒家には是を用ひず。凡此等の法、皆吾國の故實なれば、學者は兼てこれを知べし。中華に

は新濁連聲等の事なし。清濁も倭音と大に異なり。
倭讀要領卷上

（待續）